

愛知県土地分類基本調査

津島・名古屋北部

5万分の1

国 土 調 査

1 9 8 6

## ま え が き

本県では、限られた資源である県土を合理的かつ高度に利用していくため、県土の自然的条件を正確に把握することを目的として、昭和50年度から国土調査法に基づき、都道府県土地分類基本調査を国の補助を得て実施しております。

この調査は、国土地理院発行縮尺5万分の1地形図幅を単位として、土地の基本的な性格を規定している地形、表層地質、土壤等の自然的条件を科学的かつ体系的に明らかにし、地域の特性に応じた各種の土地利用計画の企画・立案のための基礎資料とするものであります。

これまでに、「岡崎」、「御油」、「半田」、「三河大野」、「足助」、「田口」、「佐久間」、「岐阜」、「美濃加茂」、「瀬戸」、「豊橋」、「田原」、「桑名」及び「名古屋南部」の14図幅について、調査、刊行してきました。

本年度は、昨年度に調査しました「津島（愛知県の区域に限る。）」及び「名古屋北部」の二つの図幅地域について調整を行い、これを統括して「津島・名古屋北部」図幅として、その成果をここに報告するものであります。

この調査成果が行政上はもちろん、各方面で広く活用されることを希望するとともに、調査の実施に当たって御協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

昭和61年3月

愛知県企画部長

春日井 文 人

## 調査担当一覧

指導	国土庁土地局国土調査課	
総括	愛知県企画部土地利用調整課	
地形分類調査	愛知県立大学文学部	教授 岡田 篤 正
表層地質調査	名古屋大学理学部	助教授 糸魚川 淳 二
土壌調査	愛知県農業総合試験場	
	愛知県林業試験場	
	愛知県農地林務部林務課	
	愛知県尾張事務所林務課	
	愛知県企画部土地利用調整課	
その他関連調査 (土地利用現況)	名古屋大学文学部	助手 北村 修 二

# 目 次

## まえがき

## 総 論

### I 位置及び行政区画

1 位 置 .....	1
2 行 政 区 画 .....	1

### II 地 域 の 特 性

1 自 然 的 条 件 .....	4
(1) 地 勢 .....	4
(2) 気 候 .....	4
2 社 会 的 条 件 .....	5
(1) 人 口 .....	5
(2) 土 地 利 用 .....	9

### III 主要産業の概要

1 農 林 業 .....	10
2 商 工 業 .....	10

## 各 論

### I 地 形 分 類

1 地 形 概 説 .....	19
2 地 形 細 説 .....	26

### II 表 層 地 質

1 表層地質概説 .....	60
2 表層地質細説 .....	62
3 表層地質分類と開発及び保全との関連 .....	71

### III 土 壤

1 土 壤 概 説 .....	82
2 土 壤 細 説 .....	87

IV 土 地 利 用 現 況 .....	111
----------------------	-----

總

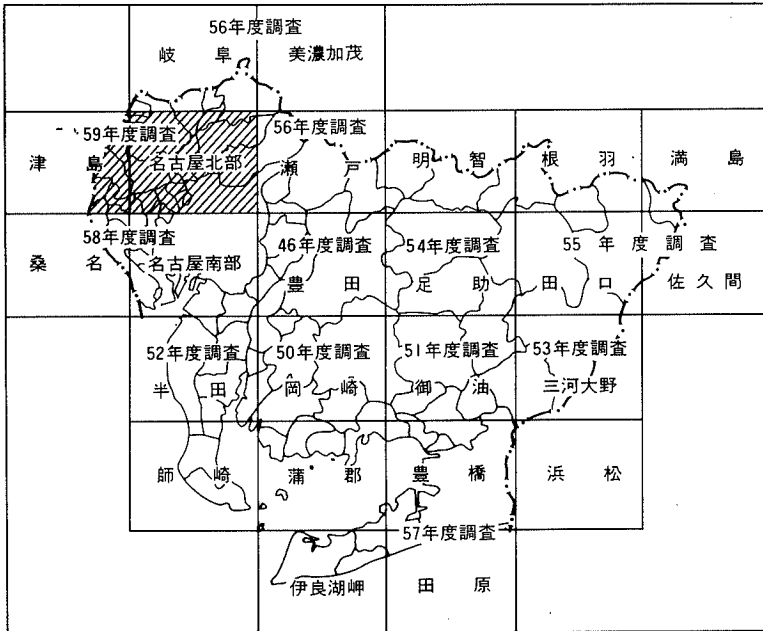
論

# I 位置及び行政区画

## 1 位置

「津島・名古屋北部」図幅は、愛知県の北西部に位置し、東経 $136^{\circ}30' \sim 137^{\circ}00'$ 、北緯 $35^{\circ}10' \sim 35^{\circ}20'$ の範囲にある。(第1図参照)

第1図 位置図



## 2 行政区画

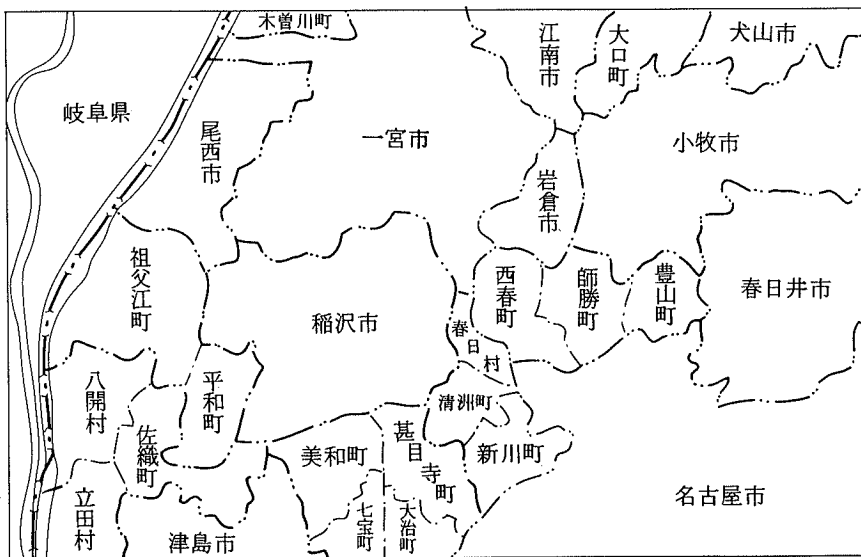
本図幅の行政区画は、第2図のとおりで、名古屋市を始めとする10市18町村からなっている。

本図幅内のこれらの市町村の面積及びその占有率は、第1表に示すとおりである。

なお、総論においては、図幅内で比較的面积が広く、かつ、地域の特性を現

わしていると考えられる、名古屋市、一宮市、春日井市、津島市、尾西市、小牧市、稲沢市、岩倉市、西枇杷島町、師勝町、西春町、美和町、甚目寺町、八開村及び佐織町の8市7町村を中心に説明することとする。

第2図 行政区画



第1表 図幅内市町村別面積

市町村名	総面積 km <sup>2</sup> A	図幅内面積 km <sup>2</sup>			図幅内 占有率 %	割合 B/A %
		津島	名古屋北部	計 B		
名古屋市	3279.1	-	745.3	745.3	15.2	22.7
一宮市	789.6	0.21	641.1	643.2	13.1	81.5
春日井市	930.3	-	405.1	405.1	8.3	43.6
津島市	253.6	5.32	8.16	134.8	2.8	53.2
犬山市	746.1	-	95.1	95.1	1.9	12.8
江南市	308.6	-	11.70	11.70	2.4	37.9
尾西市	226.1	113.5	112.6	226.1	4.6	100.0
小牧市	639.0	-	531.2	531.2	10.8	83.1
稲沢市	484.5	1.03	474.2	484.5	9.9	100.0
岩倉市	104.6	-	104.6	104.6	2.1	100.0
西枇杷島町	3.21	-	3.21	3.21	0.7	100.0
豊山町	6.39	-	6.39	6.39	1.3	100.0
師勝町	8.52	-	8.52	8.52	1.7	100.0
西春町	9.90	-	9.90	9.90	2.0	100.0
春日村	3.95	-	3.95	3.95	0.8	100.0
清州町	5.25	-	5.25	5.25	1.1	100.0
新川町	4.84	-	4.84	4.84	1.0	100.0
大口町	13.55	-	8.67	8.67	1.8	64.0
木曾川町	9.50	-	1.84	1.84	0.4	19.4
祖父江町	212.5	212.5	-	212.5	4.3	100.0
平和町	8.92	4.55	4.37	8.92	1.8	100.0
七宝町	8.52	-	4.02	4.02	0.8	47.2
美和町	10.01	-	10.01	10.01	2.0	100.0
甚目寺町	9.19	-	9.19	9.19	1.9	100.0
大治町	6.91	-	4.01	4.01	0.8	58.0
立田村	248.3	8.71	-	8.71	1.8	35.1
八開村	11.77	11.77	-	11.77	2.4	100.0
佐織町	11.44	6.39	5.05	11.44	2.3	100.0
計	9541.0	70.58	420.00	490.58	100.0	51.4

資料：① 各市町村の総面積は、建設省国土地理院「昭和59年全国都道府県市町村面積調査（昭和59年10月1日現在）」による。

② 各市町村の図幅内面積は、プランメーターにより5万分の1地形図を計測した数値である。



## Ⅱ 地域の特性

### 1 自然的条件

#### (1) 地 勢

この地域は、愛知県の西北部に位置し、東側は台地、段丘が連なるが、中央部以西には、濃尾平野の低地が展開し、東高西低の地形を呈している。

地勢についてみると、図幅の西端は木曾川が南流し、中西部には三角州性低地帯がみられる。また、この地域の南西部には、我国最大の海拔ゼロメートル地帯が及んでいる。

図幅東部には、尾張丘陵と総称される台地、丘陵がみられ、中位・下位・低位段丘群が広く連なっており、近年では、大規模な宅地造成を主とする人工改変が行なわれている。

図幅の中央北部は、木曾川の形成した扇状地の末端に位置している。中央部は、広大な濃尾低地が広がり、地味はよく肥え、農業に適している。また、ここは、自然堤防とその後背湿地からなる標高0 mから4 m程度の一宮氾濫平野が広い面積を占めている。

都市化の拡大と共に、この後背湿地は人為的に改変がなされ盛土地が増大しているが、とくに名古屋市域とその周辺部においてそれが顕著である。

#### (2) 気 候

この地域は、年平均気温が15℃前後と比較的温緩であるが、夏は高温多湿で降水量が多く、冬は低温少雨である。特に冬期は、この地域特有の伊吹おろしと呼ばれる冷めたい北西風が吹く日が多い。しかし、積雪することは少なく、古来から稲作を中心とした農業の適地となっている。(第2表参照)

第2表 気象記録

観測地点	月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年平均
	項目													
布袋	月別平均気温 (℃)	2.8	3.3	7.1	13.7	18.2	22.0	26.3	27.2	21.7	16.6	11.1	5.9	14.8
	月別最高気温 (℃)	7.6	8.8	13.0	19.1	24.0	26.7	30.6	32.2	27.9	22.4	17.1	11.2	20.0
	月別最低気温 (℃)	△2.0	△2.1	1.3	8.2	12.3	17.2	21.9	22.1	17.8	10.7	5.1	0.5	8.4
	月別降水量 (mm)	54	55	105	175	178	290	233	112	191	131	57	53	136
津島	月別平均気温 (℃)	4.1	5.0	7.9	14.5	19.3	22.7	27.1	28.4	24.1	17.8	12.2	6.9	15.9
	月別最高気温 (℃)	8.2	9.4	12.8	19.2	24.4	26.9	31.1	32.9	28.4	22.7	17.3	11.3	20.4
	月別最低気温 (℃)	△0.1	0.5	2.9	9.6	14.1	18.5	23.1	23.9	19.7	12.9	7.2	2.4	11.2
	月別降水量 (mm)	50	59	101	168	198	325	224	126	177	131	71	57	141

資料：愛知の気象（続）1961～1970

## 2 社会条件

### (1) 人口

この地域は、中部圏の中核をなす名古屋大都市圏内に位置している。

古くから繊維産業等が発達しており、高度成長期以降は、名古屋市のベッド・タウン化あるいは、産業の発展が進み人口が急増した。しかし、近年は、全国的な人口の定住化傾向から、その増加率も一時期に比べ低下し、安定的な増加となっている。

市町村別にみると、春日井市、師勝町、美和町及び甚目寺町では、近年（昭和50年～55年）においても依然10%台と、県平均の倍以上の増加率を示しているのに対し、人口密度の高い西枇杷島町においては、既に昭和40年代から漸減を示しているのが特徴的である。

西枇杷島町は、名古屋市に隣接した地域で、人口・産業の集積も早くから進

み、近年では、昼間人口指数も高まり、ベッド・タウン的性格が弱まっていると言える。

次に、産業別就業者の状況を見てみると、都市化の進展あるいは社会情勢の変化の影響を大きく受けていることがうかがえる。

第1次産業就業者は、農地の宅地化、農業従事者の他産業への流出などにより、いずれの市町村においてもその比率を大幅に低下させている。しかし、この中であって本図幅の西端に位置する八開村は、急激な人口変動もなく、第1次産業就業者構成比が依然49.7%（昭和55年）と半数近くを占めている。

第2次産業就業者は、第1次産業ほどではないが、美和町、八開村を除くすべての市町においてその比率が減少している。

一方、第3次産業就業者の比率は、いずれの市町村においても増加している。尾西市、甚目寺町、八開村を除く市町では、第3次産業の比率が最も高く、昭和45年から55年の間に多くの市町村で第2次産業から第3次産業へトップの座が移行した。

第3次産業就業者の比率が高いのは、名古屋市、春日井市、岩倉市で、いずれも55%以上（昭和55年）を占めている。（第4表参照）

第3表 人口・人口増加率の推移等

市町村	人 口					人 口 増 加 率				人口密度
	35年	40年	45年	50年	55年	35年 ~40年	40年 ~45年	45年 ~50年	50年 ~55年	55年
	人	人	人	人	人	%	%	%	%	人/㎡
名古屋市	1697093	1935430	2036053	2079740	2087902	14.0	5.2	2.1	0.4	6.374
一宮市	176281	194409	210515	234510	262372	11.3	7.6	8.8	6.2	3.206
春日井市	72174	117384	161835	213857	244119	52.1	37.9	32.1	14.2	2.624
津島市	43198	46559	51441	58241	59049	7.8	10.5	13.2	1.4	2.328
尾西市	51281	52220	51337	54247	55088	1.8	△1.7	5.7	1.6	2.436
小牧市	43470	60877	79606	97445	103233	40.0	30.8	22.4	5.9	1.616
稲沢市	51735	64480	78180	88606	90890	24.6	21.2	13.3	2.6	1.876
岩倉市	14431	21459	33843	41935	42800	48.7	57.7	23.9	2.1	4.092
西枇杷島町	16981	19119	19637	19629	18533	12.6	2.7	△0.0	△5.6	5.773
師勝町	8082	11806	24658	34177	38844	46.1	108.9	38.6	13.7	4.559
西春町	8765	13205	22082	28988	30234	50.7	67.2	31.3	4.3	3.054
美和町	7374	10050	14067	18804	20786	36.3	40.0	33.7	10.5	2.077
甚目寺町	11422	15240	20626	25697	28413	33.4	35.3	24.6	10.0	3.076
八開村	4963	4771	4752	4874	4991	△3.9	△0.4	2.6	2.4	4.24
佐織町	14027	15211	18365	20712	21425	8.4	20.7	12.8	3.9	1.882
地域計	2226277	2582220	2826997	3021462	3108679	13.8	8.7	6.4	2.8	4.233
県 計	4206313	4798653	5386163	5923569	6221638	14.1	12.2	10.0	5.0	1.213

資料：国勢調査

注) 地域計は、名古屋市、一宮市、春日井市、津島市、尾西市、小牧市、稲沢市、岩倉市、西枇杷島町、師勝町、西春町、甚目寺町、八開村、佐織町の計である。（以下同じ）

第4表 産業別就業者（常住地）

市町村	構成比 (%)						特化系数														
	55年			45年			55年			45年											
	1次	2次	3次	1次	2次	3次	1次	2次	3次	1次	2次	3次									
名古屋市	0.6	3.42	6.51	3.18	1.86	1.1	4.12	5.77	2.83	1.52	0.1	0.8	1.3	1.3	1.2	0.1	0.9	1.3	1.4	1.2	
一宮市	4.3	4.60	4.97	2.48	1.40	8.0	5.50	3.69	1.92	9.9	0.8	1.1	1.0	1.0	0.9	0.8	1.2	0.8	1.0	0.8	
春日井市	2.3	4.23	5.54	2.36	1.76	8.0	4.70	4.50	1.83	1.30	0.4	1.0	1.1	1.0	1.1	0.8	1.0	1.0	1.0	0.9	1.0
津島市	5.5	4.01	5.43	2.65	1.61	10.1	4.54	4.44	2.13	1.37	1.0	1.0	1.0	1.1	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.1	1.1
尾西市	4.4	5.71	3.84	1.81	1.13	8.0	6.72	2.47	1.18	7.5	0.8	1.4	0.7	0.8	0.7	0.8	1.5	0.6	0.6	0.6	0.6
小牧市	5.1	4.69	4.80	1.96	1.38	14.1	4.74	3.84	1.43	10.4	0.9	1.1	0.9	0.8	0.9	1.4	1.0	0.9	0.7	0.8	0.8
稲沢市	1.20	4.14	4.65	1.95	1.41	1.83	4.75	3.42	1.37	9.7	2.2	1.0	0.9	0.8	0.9	1.8	1.0	0.8	0.7	0.8	0.8
岩倉市	4.3	3.92	5.65	2.59	1.61	10.3	4.39	4.57	2.10	1.25	0.8	0.9	1.1	1.1	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
西枇杷島町	1.5	4.59	5.25	2.70	1.33	2.5	5.28	4.46	2.18	10.9	0.3	1.1	1.0	1.1	0.8	0.3	1.2	1.0	1.1	0.9	0.9
師勝町	2.8	4.63	5.09	2.56	1.40	10.5	5.06	3.88	1.84	10.2	0.5	1.1	1.0	1.1	0.9	1.1	1.1	0.9	0.9	0.8	0.8
西春町	5.6	4.29	5.14	2.52	1.18	1.26	4.40	4.32	2.07	9.1	1.0	1.0	1.0	1.1	0.7	1.3	1.0	1.0	1.0	0.7	0.7
美和町	9.4	4.36	4.69	2.22	1.27	2.06	4.14	3.80	1.77	9.8	1.7	1.0	0.9	0.9	0.8	2.1	0.9	0.9	0.9	0.8	0.8
甚目寺町	6.1	4.73	4.63	2.47	1.12	1.32	4.98	3.68	1.99	8.6	1.1	1.1	0.9	1.0	0.7	1.3	1.1	0.8	1.0	0.7	0.7
八開村	4.97	1.99	3.03	1.11	1.12	6.24	1.65	2.11	7.9	7.5	9.0	0.5	0.6	0.5	0.7	6.2	0.4	0.5	0.4	0.6	0.6
佐織町	1.14	4.21	4.61	1.97	1.36	1.77	4.91	3.30	1.37	8.7	2.1	1.0	0.9	0.8	0.8	1.8	1.1	0.8	0.7	0.7	0.7
地域計	2.1	3.75	6.04	2.90	1.74	3.9	4.39	5.21	2.52	1.39											
県計	5.5	4.24	5.21	2.38	1.61	10.0	4.61	4.38	2.02	1.26	0.4	0.9	1.2	1.2	1.1	0.4	1.0	1.2	1.3	1.3	1.1

資料：国勢調査

## (2) 土地利用

この地域の土地利用の状況を概観すると、水田を中心とする農用地が多く、特に、図幅南西部の美和町、八開村及び佐織町では、農用地の割合が50%を超えている。

図幅南東部から北西部にかけての中央部は、名古屋市、春日井市、稲沢市、一宮市といった中心都市の市街地が展開しており、住宅地、商業地を中心とした宅地利用がなされている。また、これら中心市街地の周辺では、水田、畑地といった農用地利用と宅地利用との混在がみられる。

図幅東部から東北部にかけての台地・丘陵地帯には、水田、果樹園を中心とした農用地のほか、住宅団地、工場用地が点在している。

また、本図幅内のわずかな森林は、ほぼこの地域に集中している。

なお、この地域には、中部圏の空の玄関となっている名古屋空港が位置している。名古屋空港は、名古屋市、小牧市、春日井市及び豊山町の3市1町にまたがって設置されており、敷地面積は320haで、全長 2,740 m、幅 45 m の滑走路を有している。(第5表参照)

第5表 地目別土地利用（58年）

市町村名	農用地		森 林		宅 地		その他		行政面積 (ha)
	(ha)	構成 比 (%)	(ha)	構成 比 (%)	(ha)	構成 比 (%)	(ha)	構成 比 (%)	
名古屋市	2,339	7.1	1,528	4.7	13,919	42.5	15,005	45.8	32,791
一 市	3,082	39.0	—	—	2,433	30.8	2,381	30.2	7,896
春日井市	1,202	12.9	1,748	18.8	2,643	28.4	3,710	39.9	9,303
津 島 市	1,079	42.6	—	—	622	24.5	835	32.9	2,536
尾 西 市	787	34.8	—	—	677	29.9	797	35.3	2,261
小 牧 市	1,528	23.9	836	13.1	1,742	27.3	2,284	35.7	6,390
稲 沢 市	2,383	49.2	—	—	1,079	22.3	1,383	28.5	4,845
岩 倉 市	382	36.5	—	—	320	30.6	344	32.9	1,046
西枇杷島町	41	12.8	—	—	169	52.7	111	3.4	321
師 勝 町	284	33.3	—	—	287	33.7	281	33.0	852
西 春 町	349	35.3	—	—	307	31.0	334	33.7	990
美 和 町	532	53.2	—	—	215	21.5	254	25.4	1,001
甚目寺町	364	39.6	—	—	270	29.4	285	31.0	919
八 開 村	679	57.7	—	—	106	9.0	392	33.3	1,177
佐 織 町	611	53.4	—	—	221	19.3	312	27.3	1,144
地 域 計	15,642	21.3	4,112	5.6	25,010	34.0	28,708	39.1	73,472
県 計	97,482	19.0	22,641.3	44.1	67,978	13.2	121,719	23.7	513,592

資料：土地に関する統計年報（愛知県企画部）

### Ⅲ 主要産業の概要

#### 1 農林業

この地域は、肥よくな土地に恵まれ古くから水田を中心とした農業が活発に行なわれて来た。

農業粗生産額の内訳をみると、耕種農業が約8割を占めており、県平均の6割に比して耕種農業の占める割合が高い。中でも、都市近郊という地理的条件から野菜のウエイトが高く、多品種の露地野菜が生産、出荷されている。作付面積割合の約半分を占める水稲は、農業粗生産額の24.9%を占めるに留まっている。

稲沢市では、伝統的に種苗、苗木類の生産が盛んである。また、図幅東部の台地・丘陵地帯では、果実の栽培が散在している。

畜産は、養鶏が主で、一宮市及び小牧市でそのウエイトが比較的高いが、全体的には小さい。（第6表参照）

#### 2 商工業

##### (1) 商業

本県の商業は、商品販売額、商店数、従業員数とも、名古屋市が圧倒的な比重を占めている。

この地域における、昭和47年から57年の商品販売額の伸びを見ると、県平均の3.34倍に対し、市部では、岩倉市及び小牧市が1.0倍前後の高い伸びを示している一方、一宮市では、2.80倍と県平均を下回っている。これは、繊維卸売業の伸び悩みが大きく影響しているものと思われる。

町村部では、いずれの町村も順調な伸びを示している。特に西春町（2.553倍）、甚目寺町（18.44倍）の伸びが高い。これは、名古屋市のベッド・タウン化等による都市化の進展に伴う店舗進出及び自家用車の普及による店舗の郊外化を示すものと言える。

商店規模を示す1店舗当たり従業員数では、名古屋市は別格として、他の市

第6表 農業粗生産額 (58年)

単位：十段百万円  
% 下段

市町村名	農業粗生産額		種										畜		産			加工農産物
	計	米	耕		果実		花き	その他		計	肉用牛	乳用牛	豚	鶏	その他			
			野菜	野菜	野菜	果実		その他	その他									
名古屋市	7780	1518	2420	212	790	244	2596	38	882	316	1360	—	—	—				
一宮市	9134	666	311	27	102	31	334	0.5	11.3	41	17.5	—	—	—				
春日井市	1000	1899	4020	14	80	417	2704	0	182	381	2141	—	—	—				
津島市	2191	784	440	0.2	0.9	4.6	236	0.0	2.0	42	234	—	—	—				
尾西市	1000	2487	859	428	623	117	540	2	181	166	191	—	—	—				
小牧市	4070	822	141	152	206	39	178	0.1	60	55	63	—	—	—				
稲沢市	7682	2021	833	14	40	18	170	—	—	20	150	—	—	—				
岩倉市	1000	922	309	380	1.8	0.8	7.8	—	—	0.9	6.9	—	—	—				
西枇杷島町	183	145	29	114	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
師勝町	709	522	245	7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
西春日町	1000	855	292	539	12	10	54	—	—	—	—	—	—	—				
美和町	1145	1135	481	479	1.3	0.2	1.1	5.9	—	—	—	—	—	—				
甚目寺町	1000	991	420	418	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
八間村	2733	2183	292	1716	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—				
佐織町	1000	1145	506	533	1	91	14	151	14	93	2	—	—	—				
地域計	44476	34580	11096	16549	1212	2720	3003	9895	106	1975	2538	5274	2	1				
県計	363534	234009	60205	112042	16316	29333	15913	127805	10228	23085	41574	41010	5847	1523				
1000	644	166	308	45	81	44	352	28	80	114	113	16	04	—				

資料：第31次愛知県農林水産統計年報(東海農政局)

(下段：構成比)



町村では特に大きな差異はみられない。(第7表参照)。

第7表 商品販売額等

市町村名	商品販売額(除飲食店)			57年			
	47年	57年	57年 47年	商店数	従業員 数	商店1店 舗当たり 従業員数	従業員1人 当たり商品 販売額
名古屋市	980182	3142349	3.21	52557	349137	6.64	9000
一宮市	23331	65232	2.80	4315	20691	4.80	3153
春日井市	4355	25602	5.88	3049	13085	4.29	1957
津島市	2509	10550	4.20	1130	4619	4.09	2284
尾西市	1206	6780	5.62	679	2659	3.92	2550
小牧市	3309	32405	9.79	1516	7926	5.23	4088
稲沢市	1580	9323	5.90	1197	4787	4.00	1948
岩倉市	442	4864	11.00	559	2108	3.77	2307
西枇杷島町	1277	4179	3.27	381	1669	4.38	2504
師勝町	371	3424	9.23	454	1810	3.99	1892
西春町	512	12048	23.53	455	2137	4.70	5638
美和町	208	1731	8.32	212	809	3.82	2140
甚目寺町	196	3615	18.44	371	1845	4.97	1959
八開村	21	115	5.48	43	108	2.51	1065
佐織町	230	1225	5.33	268	808	3.01	1516
地域計	1,019,729	3,323,442	3.26	67,186	414,198	6.16	8,024
県計	1,150,913	3,841,327	3.34	115,450	619,078	5.36	6,205

資料：商業統計調査

(2) 工業

この地域における、昭和48年から58年の製造品出荷額等の伸びを見ると、小牧市(2.62倍)、師勝町(3.62倍)、西春町(2.42倍)及び甚目寺町(2.53倍)が、県平均の2.40倍をわずかに上回っているのみである。

県全体に対するシェアも、小牧市が、昭和48年の2.0%から58年の2.2%にわずかに上昇しているのみで、他の市町村は全て横ばい、ないしは低下している。(第8表参照)。

第8表 製造品出荷額等

市町村名	48年		58年		58年 / 48年
	出荷額	対県計 シェア	出荷額	対県計 シェア	
名古屋市	23885 <sup>億円</sup>	24.5%	42,926 <sup>億円</sup>	18.3%	1.80
一宮市	3,343	3.4	4,535	1.9	1.36
春日井市	2,434	2.5	4,770	2.0	1.96
津島市	580	0.6	900	0.4	1.55
尾西市	797	0.8	1,098	0.5	1.38
小牧市	1,987	2.0	5,201	2.2	2.62
稲沢市	2,001	2.1	3,462	1.5	1.73
岩倉市	461	0.5	925	0.4	2.01
西枇杷島町	933	1.0	1,698	0.7	1.82
師勝町	248	0.3	897	0.4	3.62
西春町	332	0.3	804	0.3	2.42
美和町	133	0.1	281	0.1	2.11
甚目寺町	299	0.3	755	0.3	2.53
八開村	8	0.0	13	0.0	1.63
佐織町	219	0.2	190	0.1	0.87
地域計	37,660	3.86	68,455	29.2	1.82
県計	97,654	100.0	234,606	100.0	2.40

資料：愛知の工業(愛知県企画部)

これを中分類別の業種別でみた場合、昭和58年の状況は、県全体では、輸送機器36.5%、一般機械9.0%と加工組立型産業の比重が高いのに対し、この地域西部の一宮市、尾西市、佐織町などでは、基幹産業である繊維産業の低迷が著しく、このことが工業全体の伸び悩みとなって表われている。近年は、電気機器等が伸び産業構造も急速に転換しつつあるが、繊維産業に代わるまでには至っていない。

この地域の中東部は、電気機器、一般機械、食料品など比較的業種の偏りのない構成とはなっているが、増加率は平均的な伸びにとどまっている。

今後は、伝統的産業である繊維産業の振興を図るとともに、高い都市集積や名神・東名高速道路あるいは、名古屋空港といった陸上・航空交通の結節点としてのこの地域の利点を最大限に生かし、バランスのとれた産業構造への移行を図ることが期待されている。(第9表参照)。

第9表 中分類別出荷額構成比(58年)

単位：上段 億円  
下段 %

市町村名	1位		2位		3位		累積 構成比
		構成比		構成比		構成比	
名古屋市	輸送機器	7056 (16.4)	一般機械	6036 (14.1)	食料品	4784 (11.1)	41.6
一宮市	繊維工業	2296 (5.6)	電気機器	1045 (2.3)	衣服身回品	238 (.53)	78.9
春日井市	紙同製品	1077 (2.6)	電気機器	986 (2.07)	一般機械	680 (1.43)	57.6
津島市	繊維工業	302 (.336)	一般機械	79 (.88)	家具装備品	74 (.82)	50.6
尾西市	繊維工業	820 (7.47)	一般機械	85 (.77)	家具装備品	50 (.46)	87.0
小牧市	一般機械	1288 (24.8)	皮革同製品	748 (14.4)	ゴム製品	711 (13.7)	52.9
稲沢市	一般機械	696 (2.01)	その他	600 (17.3)	非鉄金属	507 (14.6)	52.0
岩倉市	窯業土石製品	288 (3.11)	電気機器	144 (1.56)	化学工業	137 (1.48)	61.5
西枇杷島町	一般機械	894 (5.27)	電気機器	425 (2.5)	食料品	195 (1.15)	89.2
師勝町	食料品	609 (6.79)	その他	57 (.64)	繊維工業	51 (.57)	80.0
西春町	その他	123 (1.53)	一般機械	109 (1.36)	食料品	89 (1.11)	40.0
美和町	電気機器	79 (2.81)	金属製品	46 (1.64)	輸送機器	40 (1.42)	58.7
甚目寺町	電気機器	117 (1.55)	その他	107 (1.42)	金属製品	78 (1.03)	40.0
八開村	家具装備品	1 (.77)	繊維工業	1 (.77)	X	( )	15.4
佐織町	繊維工業	126 (6.63)	電気機器	14 (.74)	食料品	14 (.74)	81.1
地域計	一般機械	9867 (14.4)	輸送機器	7096 (10.4)	食料品	5602 (8.2)	33.0
県計	輸送機器	85558 (36.5)	一般機械	21082 (9.0)	食料品	18103 (7.7)	53.2

資料：愛知の工業(愛知県企画部)

# 各論

# I 地形分類

## 1 地形概説

本地域は濃尾平野の中央部の低地と東縁にみられる台地・丘陵・山地より構成される。図幅の中部以西は濃尾平野の主体をなす、きわめて低平な沖積（平野）面であるが、東部は台地・段丘よりなる濃尾東縁台地、さらに東側の一部は尾張丘陵と三河山地に属する低い山地よりなる。

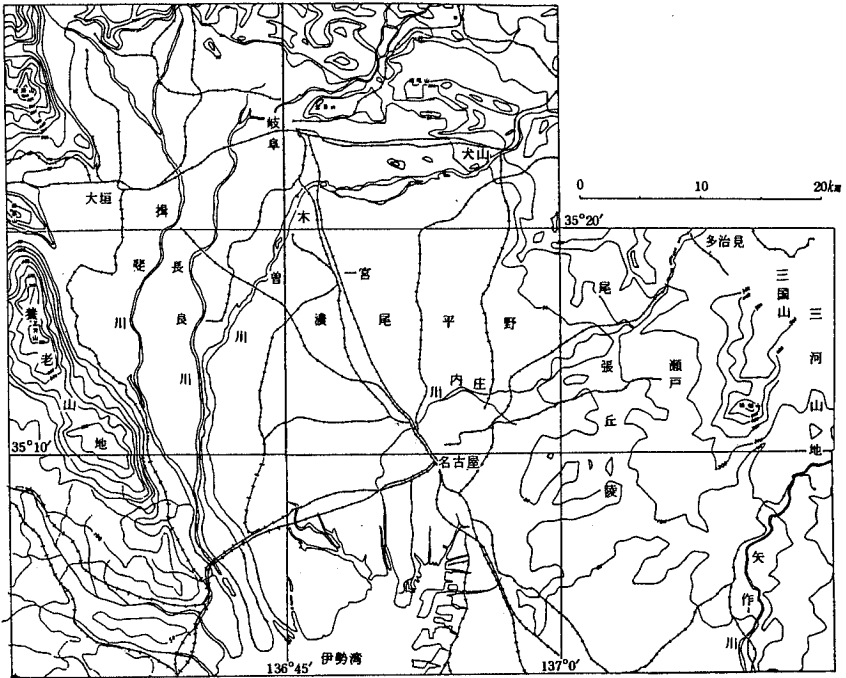
当域と周辺の地形概観は1-1図の接峰面図によく示されている。濃尾平野の西側では、池田山・南宮山・養老山地などの中～大起伏山地が連続して南方へ延び、それらの東縁は急傾斜の断層崖斜面（＝池田山～養老断層崖）である。北側では、低起伏の山地が孤立的に分布するが、さらに北方では集合して、美濃あるいは両白山地に連なる。一方、東側では尾張丘陵から東方へ徐々に高度を増して、三河山地内の三国山や猿投山の山地域に至るが、それまでの間には小起伏の丘陵性山地が広く発達している。

濃尾平野を南流する木曾三川（木曾川・長良川・揖斐川）の河道や堤防は近世以降に人為的に改変・築造されたものであるが、自然状態でも地形的に西側および南側が低く、現在の主要河川も西側沿いに流下している（1-2図・1-3図）。

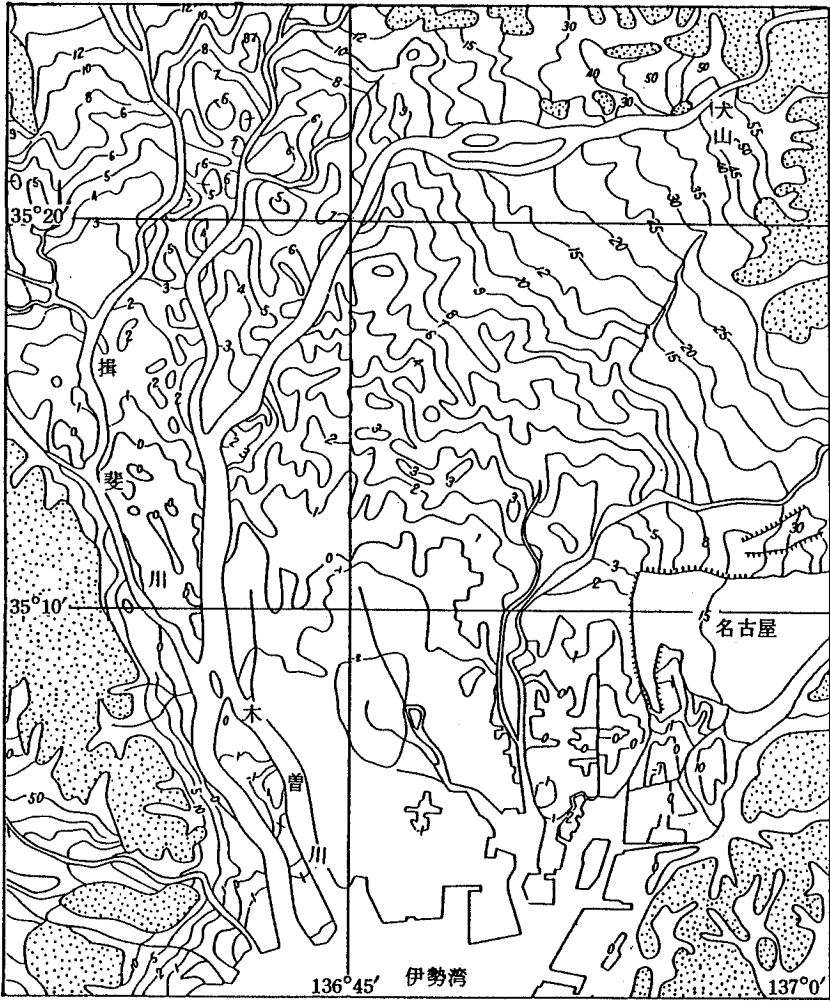
上述のように、濃尾平野から三河山地に至る地域は東高西低の地形概形をしているが、これは平野の西縁を走る養老断層と猿投山地の東縁を限る猿投-境川断層とに挟まれた地塊が西側に低く、東側に高まる地殻運動をしてきたからであり、これは濃尾傾動地塊（運動）とよばれている。

本地域の地形概形はこのような地殻運動に根源的には起因しているが、細分された個々の地形は直接的には周辺から流入する河川の侵食や堆積、海水準の変動や長期の人工的改変などによって形成されたものである。当域の地形分類の概要と周辺地域との関連は1-3図に示されている。

次に、地形的に高く、形成年代の古い山地と丘陵そして段丘から沖積面よりなる低地（1-4図）へと概要を述べてゆく。

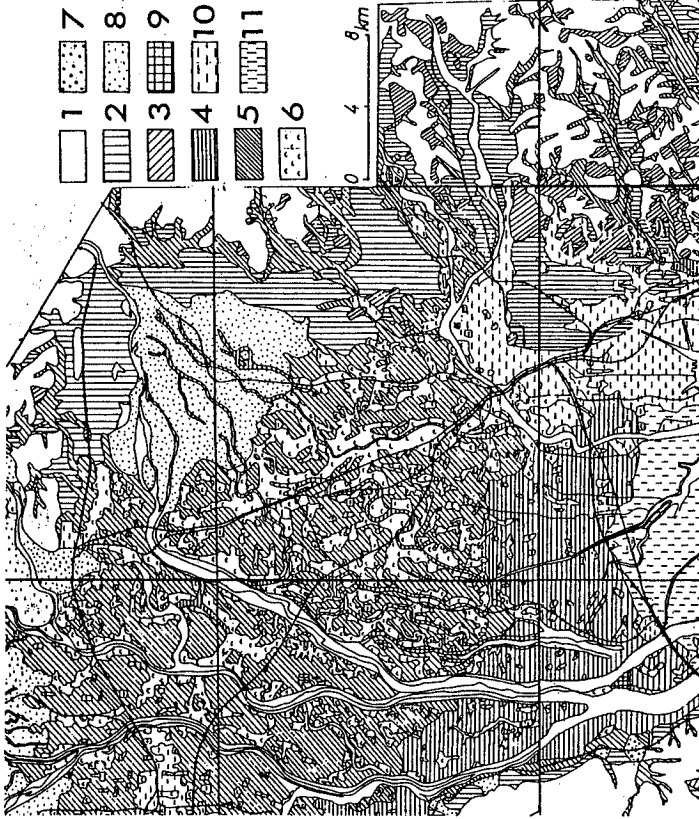


I - 1 図 濃尾平野周辺域の接峰面図 ( 国土地理院1968より編集 )



I-2 図 濃尾平野の地盤高図 (国土地理院1975による)





1-3 図 濃尾平野中部の地形概念図 国土地理院(1986)による  
 凡例, 1: 山地・丘陵・砂丘・砂堆, 2: 台地・段丘, 3: 海岸平野・後背湿地・山地・旧河道, 5: 谷底平野・氾濫平野  
 6: 自然堤防・微高地・砂丘・砂堆, 7: 山麓堆積地形, 8: 扇状地, 9: 高・盛土地, 10: 盛土地・埋立地, 11: 干拓地.

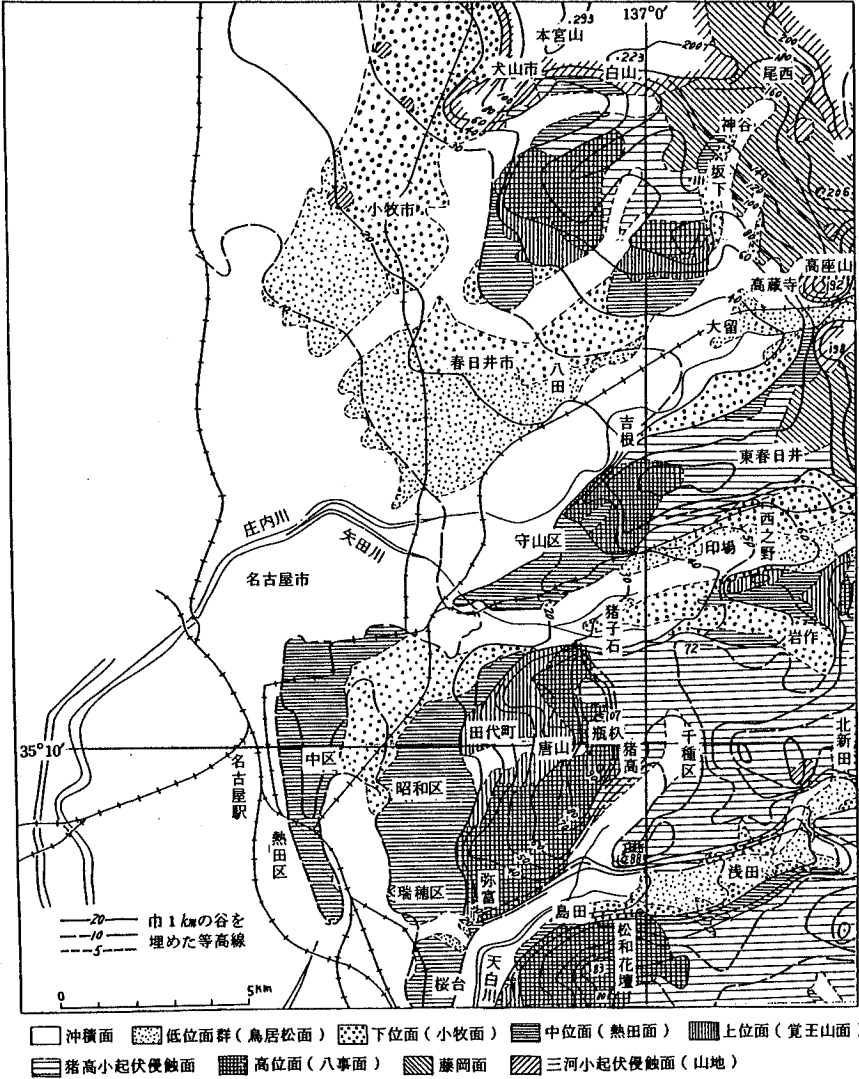
図幅の北東隅には本宮山(292.8m)を主峰とする本宮山山地がある。地質は主に古生代末から中生代にかけての堆積岩類で構成され、本地域での基盤岩石をなしている。山地の主部は比較的安定した斜面からなる小起伏山地で、山麓部に沿って丘陵性山地や緩斜面がみられ、宅地造成などの人工改変が急速に進行している。

図幅の東部には、東海層群よりなる尾張丘陵と総称される丘陵がみられる。これらの丘陵頂部は高度が比較的良好揃って定高性を示し、当域では猪高小起伏(浸食)面とよばれる丘陵背面が広く分布しているが、一部には孤立的に点在する高位段丘面も含まれている。こうした地形的特徴のために、近年では大規模な宅地造成やゴルフ場などの人工改変が行われてきたが、今後もこの傾向は続くものと予想される。

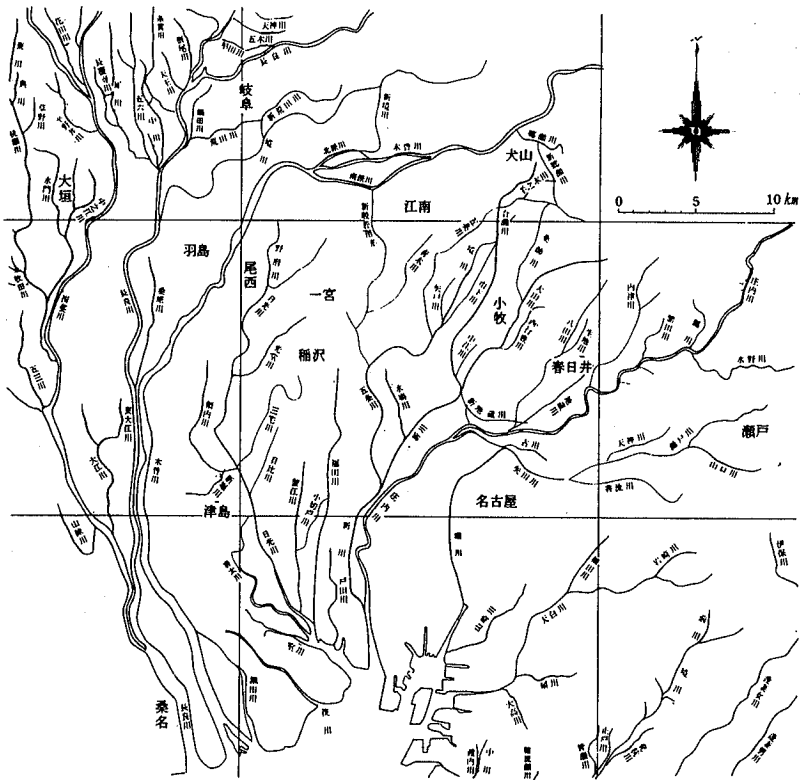
台地・段丘は図幅東部に沿ってみられ、濃尾東縁台地とよばれている。高位から低位までの5段に区分されるが、中位・下位・低位段丘面が広く発達する(1-4図)。これらのうち、北側(小牧市域付近)では、旧木曾川が形成した扇状地であり、それが旧河道や支流の大山川によってわずかに開析されて段丘となっている。春日井市域の大山川以南では庄内川とその支流の八田川・矢田川などが形成した扇状地や氾濫原平野が相対的な隆起や海水準低下などを受け、現在の河川沿いに開析されたようである(1-5図)。これらが各谷底平野の間にみられ、丘陵の西方ないし南西方の延長部に同じ方向に傾斜して分布している。これら段丘面の上は平坦であり、人間の良い生活舞台となっているが、同時に洪水による冠水を受けにくく、他の自然災害も少ないので、古くから多くの集落が立地してきた。土地条件の上で相対的に安全な場所となっている。

当図幅の低地は広大な濃尾平野の中央部とその東側にあたる。また、これに流入する大山川・八田川・庄内川・矢田川流域にも谷底部に氾濫平野がみられる(1-3図・1-5図)。

濃尾平野(尾張低地)では、沖積低地はさらに上流側から下流側へと次のように三つに区分される。すなわち、1)木曾川の形成した犬山(緩)扇状地、



I-4 図 濃尾平野東部の段丘と丘陵の地形分類概要図(国土地理院1968による)



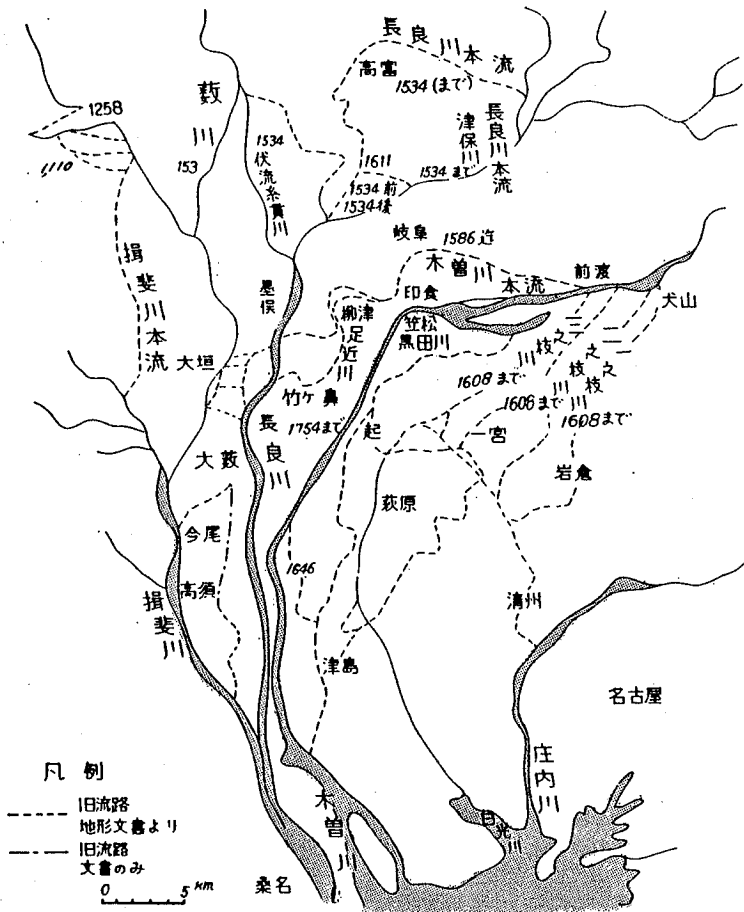
1-5 図 河川水系図( 国土地理院 1968 による )

2) 自然堤防と後背湿地よりなる一宮氾濫平野、3) いわゆる“0 m地帯”の蟹江三角州である。

犬山緩扇状地は木曾川が山地を離れる犬山付近を扇頂とし、一宮市北東部から岩倉市北部を扇端としている。ほぼ南西方向へ  $3/1000$  程度の緩勾配で傾斜している。扇頂部では標高が約45 mであるが、扇端部では約11~12 mである(1-2図)。この緩扇状地には江戸時代初頭頃まで流れていた旧河道がいくつか認められ、当時までは河道は形成途時にあり、固定してはいなかったことが判る(1-6図)。この一般面は比較的高燥で、地盤も相対的に良好である。しかし、旧河道は低湿であり、この場所に安易な埋立てを行うと、上流側に氾濫を起すことになる。

自然堤防と後背湿地が交錯する「一宮氾濫平野」は扇状地帯の南側に広がり、当図幅ではもっとも広い面積を占めている。その南縁は海部郡佐織町から西春日井郡七宝町・大治町付近である。自然堤防の明瞭なものは江戸初頭まで低地内を乱流していた主な旧河道の両側沿いに連続的に発達しており、その当時まで形成されていたものである。また、後背湿地内に散点する不明瞭な自然堤防は、さらに以前の自然堤防の系統が後背湿地の堆積物によって埋積され、孤立的に分布するようになったものである。古くからの集落は洪水による氾濫の影響がより少ない、こうした自然堤防上に立地していたが、都市域の拡大と河川の整備事業の普及により、氾濫の可能性が大い後背湿地にも埋立地が増大してきた。とくに名古屋市域とその周辺部において顕著であり、低地の大半は埋立地となっているが、一般に比高数  $m$  以下の埋立地であるので、低地の一般的特性にはあまり変化を与えていない。ただし、主な河川沿いでは堤防が強化され、排水機場も整備されてきたので、洪水の危険は著しく軽減されてきた。しかしながら、この地帯でも旧河道は氾濫の可能性が今日でも著しく高く、土地開発の上では注意を必要とする。

図幅の南西部には三角州地帯がみられ、「蟹江三角州」とよばれている。この地帯は奈良(～平安)時代頃まで三角州頂置層よりなる浅海底や砂堆・砂州であったが、それ以後における河川の堆積作用・海水準の低下・人工的改変な



1-6 図 木曾・長良・揖斐川の流路変遷図  
 (多田・井関 1955 による)

のために、陸化した地域である。もともと海水面に近接した低湿地であったが、大地震に伴う変動（岡田 1979）や昭和20年以降に激化した地盤沈下のために、現在では平均海面以下のいわゆる“0m地帯”となっている。

なお、当域の地形分類は別個になされたものがあるので参考までに紹介しておく。

図幅の全域は2万5千分の1土地条件図「津島」・「名古屋北部」でより大縮尺図の地形分類が行われ、同報告書（国土地理院 1968）で多面的に解説されている。これらはさらに国土地理院（1975）によって改訂され、地形分類や等高線の修正が行われ、報告書もより簡潔にまとめられている。また、当図幅の東南部を占める庄内川流域は建設省中部地方建設局・庄内川工事事務所（大矢・杉浦 1979、大矢 1979）によって、2万5千分の1「庄内川治水地形分類図」が作成されており、段丘や低地について詳しい分類と説明がなされている。さらに、愛知県環境利用適性調査（1979）では5万分の1の縮尺で地形分類図（濃尾平野地域）が作られている。

これらの地形分類図は大縮尺図であったり、より広範囲を一図版の対象としているから、細部をより詳しく検討したり、周囲との関係をきめ細かく把握するためには実に貴重である。こうした調査成果物も参考にされたい。しかし、これらの刊行以後に一部で地形改変が行われたり、分類基準も相互に多少異っているため、本報告書の地形分類は上述のものと同じではない。

## 2 地形細説

### 2.1 山地・丘陵地

当図幅内の本宮山山地は広義の美濃・三河山地に属するが、北東隅の小区域にみられるのみである。しかし、台地中に島状に孤立する岩崎山と小牧山も基盤岩石からなる点では、この山地に属するが、あまりにも小さい山なので、地形・地域区分図では省略している。

丘陵地は上記の山地周辺から、図幅東部にかけて塊状に分布し、一括して尾

張丘陵とよばれているが、河谷によって分離された三つの丘陵に細分される。こうした山地・丘陵地における地形の特徴は相互にやや異なるので、これらを区分して次に述べる。

### 2.1.1 本宮山山地

図幅の北東隅には、本宮山（標高292.8m）を主峰とする小起伏の地塊がある。この山地を構成する地質は主に古生代二疊紀から中生代中期のジュラ紀であり、白亜紀の貫入岩類が局部的にみられる。これらの堆積構造はほぼ東西で急傾斜している（坂本ほか 1984）。したがって、山地全体としては小起伏であるが、きわめて堅硬な基盤岩石に制約されて、山地斜面そのものは尾根部分を除くと、かなり急傾斜である。しかしながら、山麓部には崖錐や土石流扇状地がほとんどみられず、山地斜面にも崩壊地形はあまり認められない。堅硬な岩石と密な植被により、山地（斜面）はかなり安定しているといえよう。

この硬い岩石を採取する採石場が山麓部にいくつか見られ、その付近ではやや殺伐たる景観を呈している。山麓のとくに南側に沿って、丘陵地や緩斜面がみられ、こうした場所では近年とくに、宅地や工場の造成が急速に進行している。

なお、濃尾東辺台地には、花崗岩よりなる岩崎山（標高54.9m）と中生代ジュラ紀のチャートよりなる小牧山（標高85.9m）が小山地として孤立している。これらは、戦国時代の要塞として利用されたことで有名であるが、山地斜面は全体としてかなり急傾斜となっている。山頂や斜面は主に中世における人工改変も相当受けているが、現在では林地や公園として周辺住民に憩いの場を提供している。

### 2.1.2 篠岡丘陵

小牧市篠岡から大草にかけての丘陵は、標高80～100m程度の尾根筋と小開析谷よりなる。丘陵の主な地質は東海層群の矢田川累層より構成され、これは概して南西方向に数～10度で傾斜している（坂本ほか 1984）。丘陵



の周辺には、河成段丘面がみられるが、上末面とよばれている。高位段丘相当面は開析されて孤立し丘陵とほぼ同様の地形となっている（春日井団研グループ 1971）。上位面に相当する桃山面より低い平坦面は段丘面としての地形を保っており、丘陵を取巻くように分布している。

この丘陵のほとんどは桃花台ニュータウンとして大規模な住宅地が現在建設中である。ここは、ほぼ第三紀層よりなる丘陵頂部であり、地盤条件は全般に良好である。しかし、数 $m$ 以上の比高をもつ盛土法面や谷底とその出口付近においては集中豪雨時に崩壊や出水の可能性もない訳ではないので、開発者や住民の監視や対策が望まれる。

### 2.1.3 竜泉寺丘陵

名古屋市守山区の東山から北山にかけての竜泉寺丘陵は唐山層と八事層より構成される（坂本ほか 1984）。この尾根は頂部の定高性がよく、また局所的に平坦面がみられ、これらは高位段丘面に相当するものであるが、谷の開析が著しく、通常の丘陵とほぼ同じような地形状況となっている。とくに庄内川に接する丘陵北縁はその側方浸食によってきわめて急傾斜になっている。この丘陵も緑ヶ丘ゴルフ場や宅地あるいは大学などの造成が行われ、人工改変地が急速に増大しつつあり、自然状態として残されてきた本来の高位段丘面としての地形は著しく破壊されている。

### 2.1.4 千種（東山）丘陵

名古屋市千種区から名東区にかけて広がるこの丘陵は標高60～80m程度の尾根筋が複雑に分岐している。西側の丘陵頂部は唐山層や八事層より構成されるが、東側は東海層群の矢田川累層よりなり、地形的には低い。これは「地形の逆転」とよばれる現象で、新期の礫層の被覆を受けた場所は小谷の谷頭部では浸食されないが、もともと相対的に高かった第三紀層の丘陵は泥質層のため削剝がより早く進行して低下するのである。こうした現象は第三紀層の丘陵と第四紀層の台地とからなる地域では比較的良好に認められる。

この地域はここ数十年における市街地化が著しく進行して、本来の丘陵地形は著しく改変されてしまい、自然状態はほとんど残されていない。したがって、地形分類としては、ほぼ全域が人工改変地として表現されている。

## 2.2. 濃尾平野東縁台地

図幅の東部には、濃尾平野の東縁に沿う河成段丘面がみられ、その高度や連続性さらに構成層などから、5段の段丘面に細分される。それらは上位の古いものから、八事面・上末面・高位段丘Ⅰ～Ⅱ面（高位段丘面）、覚王山面・高位段丘Ⅲ面（上位段丘面）、熱田面・田楽面（中位段丘面）、小牧面・大曾根面（下位段丘面）、鳥井松面・矢田川面（低位段丘面）とよばれている（1-1表）。高位段丘面は前項で述べたように一般に地形的には丘陵状を呈し、通常の段丘面にみられるような平坦面を残していないので、丘陵として取り扱い、成因的な段丘面としては区分していない。

なお、濃尾平野の東縁に台地がみられ、その構成層は西方に除々に低下し、西部では沖積低地下に埋没して台地を全くみることはできない。これは前述した濃尾傾動運動に起因するものであり、細分されたどの台地面もこの地殻運動を大なり小なり受けている。したがって、一般に南～南西流した扇状地性の段丘面も西方への傾動を受け、南西方向に緩く低下している。

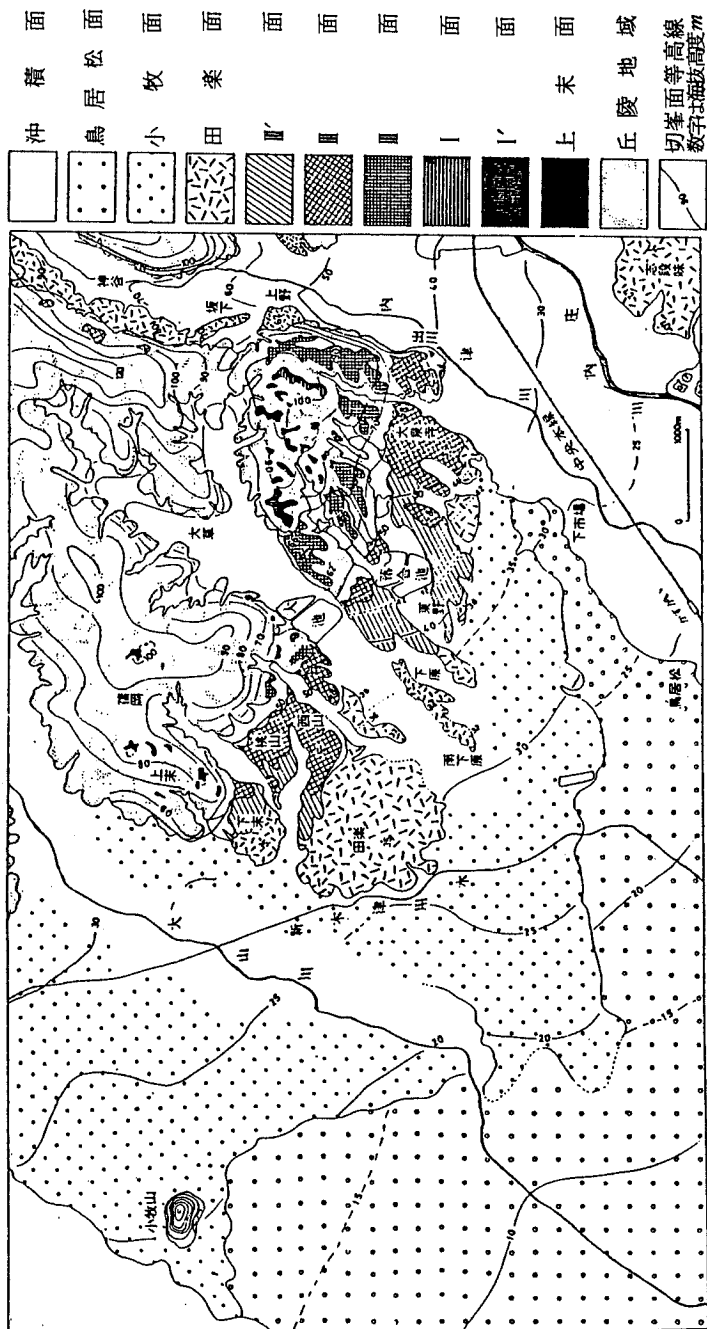
### 2.2.1 濃尾東縁台地

図幅東端にある本宮山地や篠岡丘陵を取巻くようにして、濃尾平野の東縁の台地群が分布している。上位より、上末（高位段丘Ⅰ～Ⅱ）面・桃山（高位段丘Ⅲ）面・田楽面・小牧面・鳥居松面に分類されるが、名古屋東縁台地や他地域との対比は1-1表を参照されたい。なお、小牧市南部から春日井市北部は当域で段丘面を区分する模式地の一つであるので、1-7図にその分布図を示した。

高位段丘Ⅰ～Ⅲ面は前述の篠岡丘陵の南側に沿って分布し、それぞれ潮見坂礫層・桃園園礫層・桃花礫層によって構成される（坂本ほか 1984）。しか

I-1表 調査地および周辺の地形面・地層との対比

地域 地形分類 面構成層	春日井 春日井団研(1971) 坂本他(1984)	名古屋 国土地理院(1968) 坂本他(1984)	各務原 国土地理院(1968) 春日井団研・高木(1971)	矢作川流域 町田他(1962) 国土地理院(1968)
沖積面	沖積面 沖積層	沖積面 南陽層・濃尾層 (矢田川面)	沖積面 沖積層	沖積面 沖積層
低位段丘面	鳥居松面 鳥居松礫層	(矢田川面) (矢田川礫層)	前渡沼面 低位段丘層	籠川面(上・下2面) (籠川層)
下位段丘面	小牧面 小牧礫層	大曾根面 大曾根礫層	犬山面 犬山礫層	越戸面 越戸層
中位段丘面	田楽面 熱田層上部層	熱田面 熱田層	各務原面(a・b) 各務原層	碧海面 碧海層
上位段丘面	高位段丘■面 桃山礫層 高位段丘■面 桃花園礫層	寛見山面	高位2面 (高位段丘2層)	孝母面 孝母層
高位段丘面	高位段丘I面 潮見坂礫層 上末面上	八事面 八事山層	高位1面 (高位段丘1層)	三好面 三好層
丘陵背	猪高面 矢田川果層	猪高面 矢田川果層 (猪高部層)	尾張丘陵面 矢田川果層	藤岡面 土岐 土岐砂礫層



1-7 図 小牧市南部～春日井市北部付近の地形面分布図  
 (春日井団研グループ 1971による)

し、地形的な差違はあまりなく、相互の境界線もあまり明瞭でないので、国土地理院（1968、1975）・春日井団研（1971）・坂本ほか（1984）などの間でも細部での分類は異なっている。ここでは上位段丘面として一括して取扱い、細かい地形的相違は省略する。なお、詳しい地形や地質は春日井団研（1971、1-7図参照）や坂本ほか（1984）に記載されている。

中位段丘面に属する田楽面は春日井市田楽付近を模式地として、その東方の高位段丘面の先端に局部的にみられる。標高35m前後の平坦面を広く残す段丘面であり、熱田層の上部層で構成される。周囲を取巻く小牧面との間には明瞭な段差がなく、一般に漸移する。この面は東方に徐々に高度を増し、堆積物も亜円礫層からなるので、東方から南西流した旧庄内川水系の形成によるものようである（春日井団研 1971）。

犬山市焼野・勝部付近から小牧市街地を経て春日井市八田町・篠木に至る平坦で低平な段丘面は小牧面とよばれ、下位段丘面に属する。当域でもっとも広く分布する開析扇状地面であるが、東～東北方の山地・丘陵から流下した沖積谷底によって下流（周辺）部は下刻されている。平坦面上には主に旧河道起源の浅い谷がいくつも認められる（写真1-1）。



写真1-1 名古屋空港北方からみた濃尾平野北東部の地形 北方を望む。中央左方の小丘は小牧山、右方の市街地は小牧市中心部。写真の大半は犬山面・小牧面の下位・低位段丘面で、旧河道起源の台地上の浅い谷が中央下部にみられる。遠景は美濃山地  
(1982年2月25日撮影)

谷底面との比高は数  $m$  程度と低い。この面の構成層はチャート礫を主体とし、角岩・砂岩・泥岩などの混った河成礫層であり、最上部に厚さ約  $1 m$  のシルト層ないし砂層が被覆する。大山川や八田川などの河川はこの面の凹地を選んで流下しており、ほとんど下刻せず、むしろ山地や丘陵の周辺ではこの面を薄く沖積層が被覆している所も多い。地名に ～新田と名のつく集落が多い。これは江戸時代に木曾川水系からの用水工事によって開墾された場所で、畑地や水田の多い土地であったが、近年は市街化が急速に進行している。それらをうながした名古屋水道・木津川用水（合瀬川）・新木津川用水などの新しい堀削人工河川や高速道・主要道も多く通過し、さらに人工改変地も拡大して本来の地形状態が現在では判りにくくなっている。

最下位段丘面である鳥居松面は小牧山の南側から名古屋空港・庄内川北側（右岸）の春日井市鳥居松方面に広く発達する。この段丘面はもっとも平坦で、沖積面との比高はほとんどなく、西方および南方で沖積面下に埋没している。この面の構成物質はチャートや砂岩を主とする亜円礫層であり、表層の一部には黒ボク土壌もみられる。この面は旧木曾川水系の形成した名古屋空港北方部分と旧庄内川の形成による春日井市鳥居松～勝川部分とがあり、共に南西方に緩く低下し、沖積面下に没入しているので、最終氷期の海面低下時かその後の海面上昇途時のある時期に形成されたもののようである。

### 2.2.2 名古屋東縁台地

北端にある名古屋城付近から南部にある熱田神宮付近に至る地域は南北方向に細長い台形をなす。また、名古屋市千種区赤坂町から南区笠寺町に至る地域も名古屋東部丘陵（覚王山面を含む）地帯と後述の大曾根面・沖積面に挟まり、南北に細長くのびる台地を形成している。これは熱田層が構成する中位段丘面で、熱田面とよばれ、図幅内では標高  $20 \sim 10 m$  の平坦な段丘面である。熱田層は模式地では粗い砂層を主体とし、その中にシルト層や小粒の礫層を挟み、また、軽石（層）を多く含む。層厚は  $30 m$  から南方に向かって厚くなり、 $60 m$  にも及ぶところがある。地表部では一般に黄褐色に風化した土壌が発達

している。

庄内川と矢田川に挟まれた守山区小幡付近の大半の段丘面も熱田面に対応する中位段丘面で、西方へ半島状に突き出している。この付近では径3~5cmの亜円礫のチャートをもととする褐色の砂礫層で構成され、矢田川沿いではシルト層と礫層の互層となる場所もある。これらは旧庄内川水系によって運搬された堆積物であろう。

熱田面の間には大曾根面とよばれる下位段丘面が幅1~2kmの浅い谷状をなして分布する。この図幅内では上位にある熱田面との比高は数m程度と低いが、南方になると10m以上になる。これは大曾根面を形成した旧矢田川は最終氷期の最盛期(約2万年前頃)には大曾根付近より南流して伊勢湾に注いでいたが、当時の海水面は現海面から百数十mも下位にあり、河床勾配が急であったためとされている。その後の完新世の高海水面(現在とほぼ同等か数m高位)により、旧河床の下流側はいわゆる沖積層によって埋没されてゆき、最下流部では大曾根面の構成層は完全に沖積層に埋没された。中上流部では大曾根面は低位段丘面として残り、かつ、もう一時代前の相対的な海水面上昇期に形成された熱田面との間では平坦面の比高や崖高が場所的に異なるのである。

この面は旧河床礫とみられる層厚5m前後の大曾根層より構成されるが、大曾根付近より南流していたこの旧矢田川は堆積後に庄内川と合流して流路が大きく変更したようである。この大曾根面および大曾根層は上述のような観点から最終氷期の最盛期である1.8~2万年前頃と考えられている。

### 2.3 濃尾平野(=低地)

当図幅では低地の地形がもっとも広く発達し、人間の主要生活舞台としてよく活用されている。しかし、低地は自然状態では洪水時の氾濫をたびたび受けてきた場所である。また、地震動に対しても相対的に大きく振動するので、この土地利用は今日でももっとも注意を要する場所である。

当域では木曾川水系の形成よりなる濃尾低地と、庄内川水系よりなる谷底平野がある。とくに前者は、1) 犬山を扇頂とする扇状地、2) 自然堤防と後背

湿地よりなる中下流域、3) かつての海底面である三角州よりなる下流域、  
4) 三角州前面の頂置層よりなる干潟（現在では干拓地化されている）という  
沖積平野の基本的な配列が日本でもっとも見事にみられる場所である。この図  
幅内では、扇状地・自然堤防卓越地帯・三角州が主にみられるので、これらに  
ついて次に解説する。

### 2.3.1 犬山（緩）扇状地

濃尾平野の北東部には木曾川が形成した扇状地がある。これは犬山付近を扇  
頂とし、この付近で標高約45mであるが、扇端の一宮市極楽寺・岩倉市八劔  
～石仏付近では約11～12mとなる。この扇状地表面は西～南方へ広がり、半  
径約12kmにも達するが、千分の3程度の緩勾配である。扇頂部の地名と緩傾  
斜の特徴から、犬山緩扇状地とよばれている（国土地理院 1968年ほか）。

美濃・三河山内では峡谷状の急勾配で流下してきた木曾川は、犬山付近か  
ら急に緩勾配の濃尾平野に出る。その流速は急激に減少し、河道も多方向に分  
岐するので、上流から運ばれてきた相対的に粗粒な物質がこの付近に堆積する。  
扇状地の表層では灰褐色または黄褐色の砂層（厚さ1.5m以上）があり、これ  
は自然堤防卓越地帯の上部砂層に連続すると考えられる。扇状地の中央部に位  
置する尾西市古知野（標高18m）付近のボーリング資料では、表層から2.4  
mまでが細砂層、5.4mまでが砂の多い礫層であり、この部分までが沖積（＝  
完新）世の堆積物とされている。それ以下の2.8mに及ぶ砂礫層はN値35以  
上で、18m付近から熱田層の特徴である軽石を多量に含んでいるので、この  
間に低位（鳥居）面・下位（小牧）面の構成層が除々に堆積してきたと考えら  
れている（国土地理院 1968）。なお、これらの地層は南西方に深くなると共に、厚くなるので、濃尾傾動地塊の東高西低の地殻運動の影響を受けつつ、  
堆積が進行したようである。

この緩扇状地には、多くの旧河道（流路～河道跡）があり、それらは扇頂部  
から扇端部に向かって放射状に延びている。これらの旧河道は東側から一之枝川  
・二之枝川・三之枝川・黒田川とよばれ、木曾川の分流ないし支流であったが、



江戸時代初頭（1609年）に尾張国の西側に沿って御囲堤が完成してからは、ほぼ廃川となり、河道の跡だけが残された（I-6図参照）。これらの部分は平坦な緩扇状地面が2～3m以上も刻まれているので、典型的な扇状地にみられる浅い河道と比べて、相対的に深い河道となっている。これは、その後の傾動運動による地盤の微隆起や運搬物質の欠除などに対して長期間にわたる流水の下刻作用が生じたからと考えられる。したがって、この旧河道は今日でもなお洪水時には河川としての機能を残しているのである。最近、ところどころで旧河道を盛土して工場や住宅地が進出しつつあるが、その上流側に内水氾濫の可能性を増大させることになるので、安易な造成はさけるべきである。

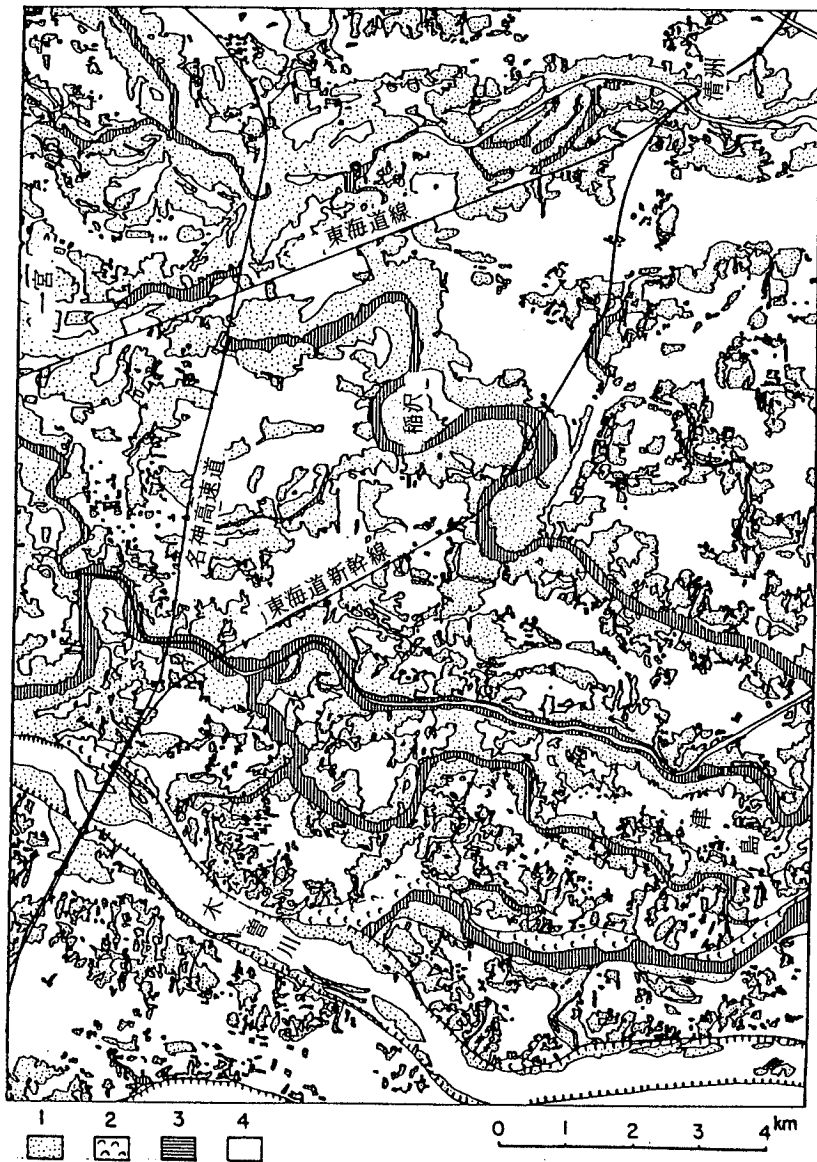
一方、犬山緩扇状地の一般面はわずかに傾斜するが、平坦度は高く、相対的に高乾である。地盤の状態は概して良好であり、通常の構造物の支持基盤として、とくに問題となることはないであろう。

### 2.3.2 一宮自然堤防地帯（一宮氾濫原）

犬山緩扇状地と一宮自然堤防地帯との境界部は一宮市葉栗～西成・岩倉市千秋町～井上町を結ぶ線である。東縁は岩倉市街地北東部から南下して名古屋城～名古屋駅に至る線であり、濃尾東縁台地の西縁がその境界になっている。南縁は蟹江三角州地帯との境界線で、八開村赤目～佐織町草平新田～美和町木折を結ぶ東西線であり、ここから南東方向へ向きを変え、大治町一本木に至る。当図幅では愛知・岐阜県境になっている木曾川が西縁となっているが、同様の低地域はさらに西方にも拡がっている。

この地域は自然堤防とそれを育成した旧流路、また、これらに挟まれた後背湿地をなす氾濫原（氾濫平野）などが交錯する場所である。ここは濃尾平野の中央部を占める広大な低地域である（国土地理院 1968・75）が、こうした地形が日本でもっとも典型的かつ大規模に発達している所であり、その中心部の典型的場所をI-8図に示す。

自然堤防は主に江戸時代の初頭より以前の長期にわたって形成されたものである。犬山緩扇状地の中を分流してきた旧木曾川の諸河川（I-6図）は礫質の



1. 自然堤防および中州, 2. 河畔砂丘, 3. 旧河道, 4. 後背湿地および水路。

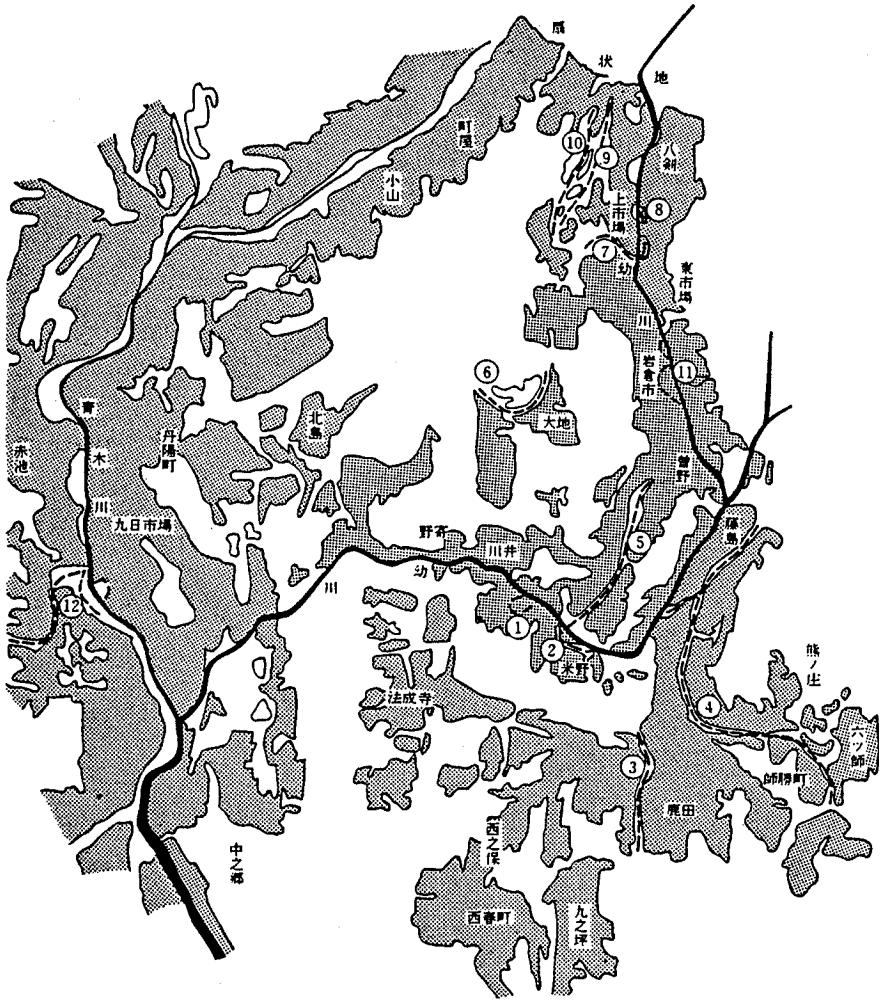
1-8 図 一宮自然堤防帯の微地形分類図  
(森山 1972 による)

粗粒物質を扇状地部に堆積させたあと、相対的に緩傾斜の低地部により淘汰された砂質堆積物を主として洪水時の高流速時に旧流路の両側に沿って自然堤防として累積してきたものである。とくに木曾川の上流部は花崗岩の分布域が広く発達し、砂質物質の主な供給源となっている。上中流部の急流による運搬作用と多量の砂の供給が下流部での顕著な自然堤防の育成にとって主な要因になったと一般には考えられている。

また、この自然堤防を洪水後に氾濫した濁水は自然堤防間の後背湿地に泥質物を堆積させたが、洪水時の沈静下と共により低所の旧流路が、排水路として再び河道となるのが一般的である。しかし、河道も蛇行による浸食や堆積作用で徐々に変化してゆき、旧期の自然堤防～旧流路は氾濫原の中に埋没され、連続性などが不明瞭となってゆく。例えば、朝日遺跡では埋没した旧河道が認められ、これは弥生時代の小海退期に形成されたが、古墳時代以降の海面上昇（≡温暖期）期に堆積され、平安時代末ないし鎌倉期までにはほぼ現在のような同一水準の地表面（現在の水田下約30cm）となったようである（井関1975・82）。

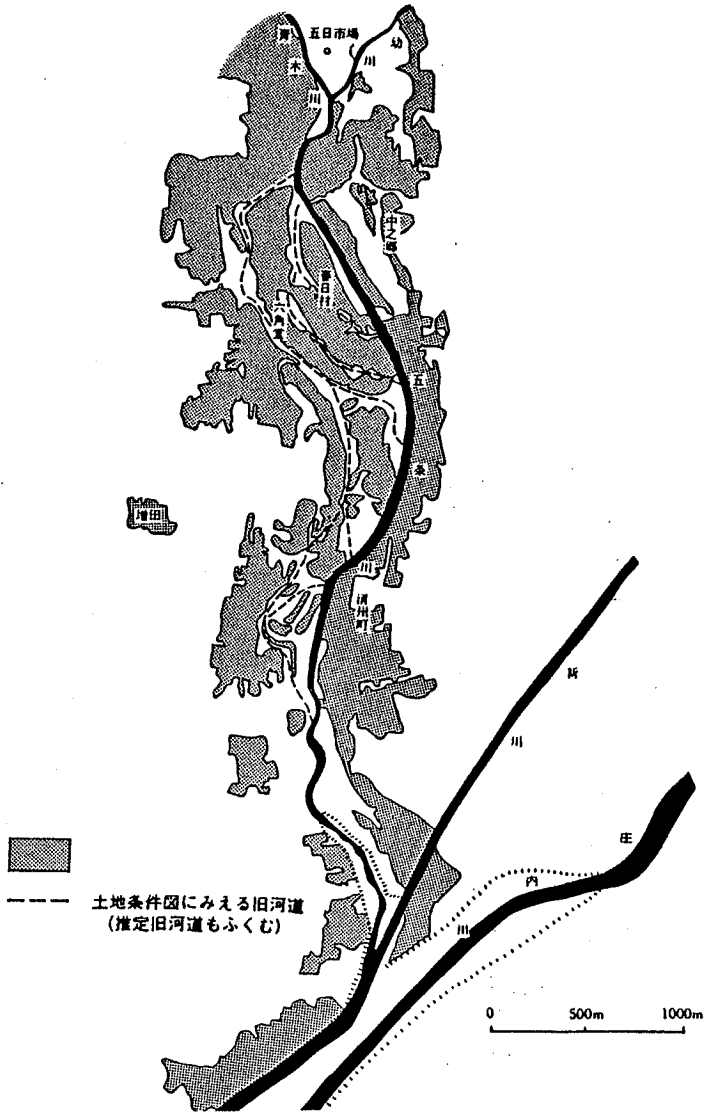
したがって、自然堤防や旧流路には形成時期の異なる新旧のものがある。一般に地形的な連続性が良く、周囲の氾濫原より数m高い自然堤防や旧流路は近世初頭頃まで形成されていた（1-9・10図）ものであるが、孤立的な分布を示し、氾濫源との比高も小さいものは一般により古期に形成され、戦国時代頃には埋積されていたものである。

主要な自然堤防地帯は近世初頭までの木曾川水系の分流や庄内川に沿う旧流路に沿って発達している。東側から、1) 庄内川系統、2) 一之枝川-幼川中流系統、さらに師勝町六ツ師および南方に至る地帯（1-9図）、3) 二之枝川系統-青木川（1-10図）-五条川系統（1-11図）、4) 三之枝川-大江用水の一部-三宅川系統（写真1-2参照）、5) 黒田川-日光川系統、6) 領内川系統、7) 佐屋川系統 などの流路に沿って、とくに明瞭な自然堤防が連なり、それらの中央部にかつての曲流した河道である凹地が今日でも多く認められる（1-9・10図、写真1-2）。

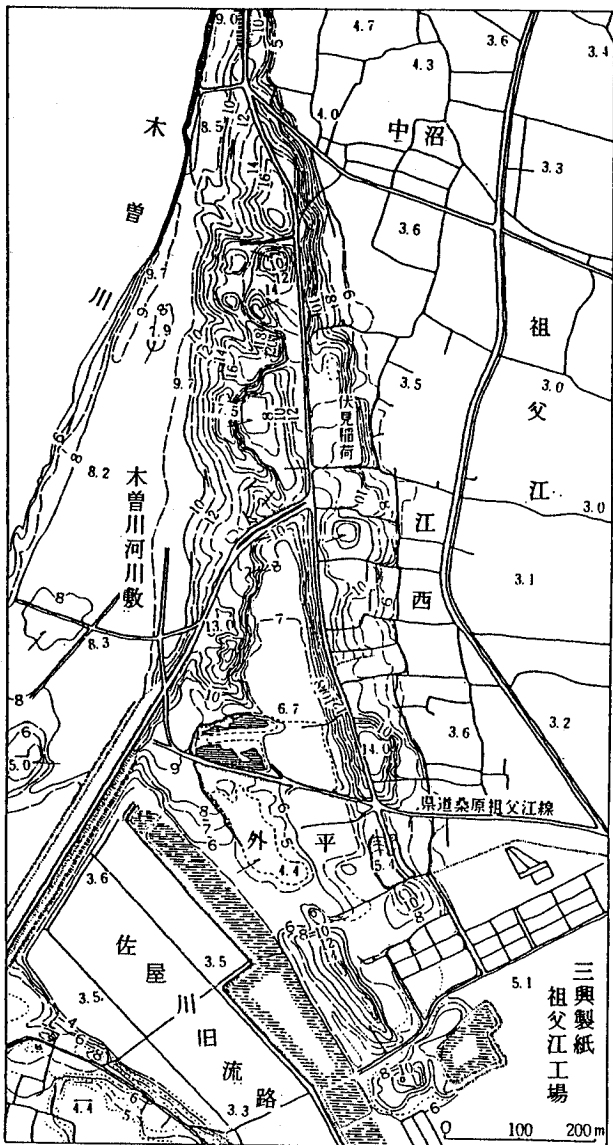


- 自然堤防洲
- 土地条件図にみえる旧河道 (①~⑫)

1-9 図 幼川の自然堤防と旧河道  
(水野 1982 による)



I—10図 五条川に沿う自然堤防と旧河道（水野 1982 による）  
 自然堤防は土地条件図（国土地理院 1975 による）



1-11図 中島郡祖父江町江西付近における木曾川東岸河畔砂丘  
 (森山・木下 1979 による)

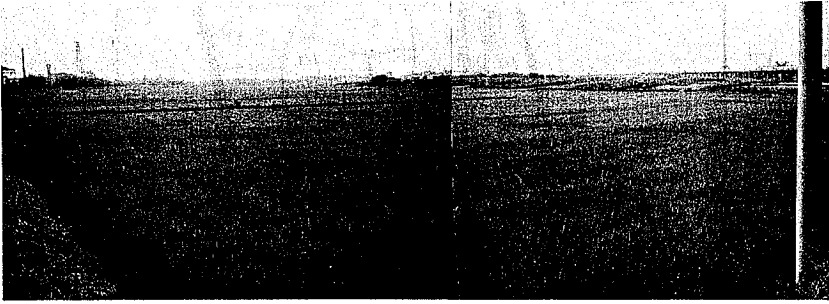


写真1-2 稲沢市矢合町付近の三宅川に沿う旧河道と両側の自然堤防  
東方を望む。  
水田面が旧河道で、自然堤防は畑や宅地として利用されて  
いる。右手を東海道新幹線が斜走する。(1984年8月撮影)

自然堤防は相対的に高乾であり、洪水の影響を受けにくいので、古くからの集落や道路、さらに農業用地としては畑・果樹・植木などとして利用されてきた。低地部でのもっとも重要な生活舞台を提供してきたといえよう。

ところで、木曾川とその旧分流であった佐屋川の東岸の一部には、日本では数少ない河畔砂丘が自然堤防の上に発達している。これは木曾川の自然堤防地帯のみ認められ、近世以降の河川統合後に生じた堆砂の集中化と冬の季節風によるものとされている(森山・木下 1979)。その典型例を1-11図に示すにとどめるが、他にも木曾川町里小牧・尾西市富田～祐久・祖父江町河西・同町野田・八開村二子・津島市野田新田などにも認められている(森山・木下 1979)。

一方、氾濫原や旧流路はより低所であるため、洪水時には冠水を受けやすく、主として水田として利用されてきた。近世から明治時代を経て大規模な河川の統合や治水事業が行われてきた結果、洪水の影響を受ける危険性は今日では著しく減少してきたといえよう。しかし、昭和51年9月の台風による長良川堤防決壊による岐阜県安八郡を中心とした洪水被害のように、予想外の集中豪雨時には洪水の危険がやはりより高い地域であることには間違いない。とくに、前述の主な旧流路は近世初頭頃まで木曾川が分流していた河川跡である(1-6図)。その周辺においてももっとも低い凹地帯であり、冠水の危険がより高い

地帯であるので、土地利用に関しては十分に留意すべきであろう。

### 2.3.3 蟹江三角州地帯

図幅の南西部には、三角州頂置層で形成される三角州平野がみられる。この北縁はほぼ津島市街地付近から名鉄津島線を経て、美和町・七宝町付近から大治町堀之内に至る線である。この南縁は近鉄名古屋線付近までであり、南側の「桑名・名古屋南部」図幅（岡田 1985）と共に、いわゆる「濃尾0m地帯」の大半を構成する平均海面以下の低湿地である（写真1-3）。



写真1-3 甚目寺町南部から大治町付近の地形 甚目寺町南部上空より南望一宮自然堤防地帯から蟹江三角州帯へ移行する付近で、中央部を庄内川が曲流し、新川がほぼ並走して南流する。  
(1978年11月24日撮影)

北縁は条里制の遺構などから奈良時代の海岸線と推定され、南縁は中世貝塚の分布や古地図からみて、鎌倉時代頃の海岸線とみなされている（国土地理院1968）。

この地帯は庄内川・福田川・蟹江川・日光川・木曾三川などの旧諸河川が、



上述のような歴史時代に上流から運搬してきた細粒物質を当時の河口付近に堆積して三角州を形成し、それが徐々に南方に拡大し、人工的土地改良事業も受けて陸化してきた場所である。

この地帯になると、連続性のよい、相対的に規模の大きい自然堤防は上流域の氾濫平野ほど幅広くも連続的でもなくなる。むしろ、孤立的に分布する所が多い。こうした微高地は0 m地帯における海面以高の場所であり、相対的に高燥であるから、古くからの集落が立地し、畑地や植木・果樹園などの土地利用が行われてきたところである。

一方、低地の一般面は後背湿地とよばれ、海拔0～1 m強の平均海面下であり、極めて低湿で平坦である。地下水位は地表面から0.5 m未満であり、湿地や蓮田として利用されてきた。庄内川以西には、福田川・蟹江川・日光川などの南流する大規模の人工排水河川があり、さらに縦横に走るクリーク性の排水～利水溝が掘られ、水郷地帯の景観を呈する地域もある。これらの低湿地は集中豪雨時には最期にわたって湛水を受けることが多かったが、最近では多くの場所に排水機場が常設され、その排水能力も高くなり、土地生産力も増大し、洪水による被害も減少してきた(井関 1972、国土地理院 1975、東海三県地盤沈下調査会 1985ほか)。

この三角州地帯は歴史時代において、木曾三川や庄内川河口域にあった三角州や河口州の頂置層や前置層が南方に堆積・拡大すると共に、これら砂州の微高地を利用して内部にあった低地や水面が干拓され(井関 1972)、多くの排水河川が開削されてきた。とくに規模の大きい人工河川はほとんど江戸時代さらに明治時代以降に形成・拡大されたものである。

この地域を構成する沖積層は一般に地表面から、最上部粘土層・上部砂層・下部粘土層の順に堆積している。沖積層の厚さは東部に薄く、西部で次第に厚くなり、木曾川方面では70 mにも達している(国土地理院 1968・75、井関 1980、東海三県地盤沈下調査会編 1985)。最上部粘土層は暗灰色～黒灰色の軟弱(N値0～2)な粘性土で、その厚さは1～2 mと薄い。上部砂層は暗灰色の中～細砂(N値8～15)からなり、層厚は7～10 mで全

域を広く覆っている。シルト層や腐植質層が部分的に混入したり、貝殻も時折含まれているので、これらの大部分は浅海底堆積物とされている。

この下位の上部粘土層は南陽層ともよばれ、暗緑灰色・暗灰色の軟弱な(N値0~3)粘土やシルトからなる。貝殻の混入も多いので、いわゆる完新世(または縄文)海進期の典型的な浅海底堆積物である。層厚は10~30m以上で、これも東から西に徐々に厚さを増す。これが一般に言われている濃尾低地の軟弱地盤の主体であり、この層が厚い場所ほど地下水の過剰揚水によって生ずる地盤沈下を起しやすい。この粘土層の微化石分析を行ってみると、下位から次第に気候も温暖化し、海進の進行と共に内湾域が拡大していった過程がよく判っている(国土地理院 1968・75、東海三県地盤沈下調査会編 1985)。

#### 2.3.4 庄内川流域低地

図幅内の庄内川低地は庄内川とその支流;矢田川との合流部以東であり、現河川沿いには自然堤防がみられ、その背後に低地の一般面である後背湿地と旧河道が複雑に入り込んだ谷底氾濫平野が分布する。近年の名古屋都市圏の拡大と共にこうした谷底面も数m程度の盛土が行われ、住宅地や工場用地等が急速に進行している。

しかし、庄内川上流域は花崗岩や東海層群の分布地であり、とくに洶土層の採掘がかなり古い歴史時代から行われてきたので、河川堆積物の供給はとみに著しく、洪水対策としての堤防の嵩上げを行うと逆に河床高を上げることになり、天井川化が進行してきた(小出 1968)。江戸時代から今日に至るまで、新川の掘削や河川改修・堤防の強化が営々として行われてきたので、現在ではかなりよく整備された河川堤防となってきたものの、予想外の集中豪雨時に対しては万全ということはない。低地面中のとくに低い旧河道などの土地利用や後背湿地などの造成工事がもしどうしても必要とされる場合には、周辺に対する十分な配慮が必要である。

## 2.4 土地（地形）条件と自然災害

当域において、土地（とくに地形）条件に関連して想定される自然災害は大きく分けて次の4種類になる。それらは、1) 山地・丘陵地の崩壊による災害、2) 低地での河川洪水災害、3) 地震災害、4) 地盤沈下災害である。地盤沈下災害については表層地質で取り扱われているので、各論Ⅱを参照されたい。なお、これらの記述は主に国土地理院（1968・75）や末尾の文献に示した愛知県庁や市役所等の報告書によっているので、さらに詳しい検討はそれらを参照されたい。ところで、台地基部における斜面崩壊とその被覆、さらに末端での崩壊・地這りの可能性もあるが、相対的に少ないのでここでは省略した。各地形における災害の種類等は1-2表に示している。

### 2.4.1 山地・丘陵地の災害

尾張丘陵域の土地条件図報告書（国土地理院 1968）に記入されているとくし。禿積地や崩壊地の分布図をみると、起伏量の大きい場所にかなり数多く認められている。また、明治時代に作られた地形図には、丘陵地のほとんどの地域に、矮小林や荒地の記号がある。戦後間もない時代に撮影された米軍の空中写真では、現在よりはるかにとくし。禿積地や崩壊地が多かった。これらのことは当域の丘陵が過去に広汎な悪地地形であったことを示すとともに、現在でも一部地域でこの傾向が継続している。しかし、これら丘陵地は近年大規模な工場や住宅(団)地が造成され、地形は急速にかつ大きく改変されつつある。

丘陵地の地山部分は相対的に地盤強度が当域で最も高い場所であるが、盛土部分や旧河谷の埋立て部分は必ずしも安全ではない。昭和53年の宮城県沖地震の際、このような埋立地での地盤被害がとくに大きかったことは記憶に新しいところである。集中豪雨時でも、盛土地の末端や急傾斜切割の下方などが崩壊や地這りの危険が大きい。また、山麓部や山地・丘陵中の低地でも土砂流出の可能性もある。土地開発に当たっては、こうした地形条件を十分に配慮することが望まれる。

I-2表 当城の地形・地質・土地利用・災害の一覧表(国土地理院1968による)

地形の種別	地形面の名称	地形の主な特徴			地層名	構成物質	土地利用の現況		予想される災害
		比高	傾斜	傾斜の方向			土地利用	現況	
山地	三位中位 小丘伏面	100~ 500m	谷低度 やや 高い	平野、丘陵に向って 高さを減ずる	秩父古生層	凝灰岩、砂岩、粘板岩 角岩、頁岩、礫岩	①砂防、水源涵養を兼ねた造林 ②観光、保養、信仰の対象	土石流、崩壊、崖崩れ 集水氾濫	
	丘陵面	50~ 60m	非常に 高い	北東から南へゆるく 傾斜	瀬戸陶土層 矢田川系層	粘土、シルト、砂 礫	①砂防のための造林 ②陶土の産地 ③一部遊樂地、ゴルフ場、公共施設用地	泥流、土砂流出、崖崩れ、集水氾濫、崩壊	
段丘	高位段丘面 (丘陵面)	30~ 60m	やや 低い	尾張丘陵では同上	八事層、 鹿山層、	〃	①住宅、遊園地、公共施設の用地 ②畑地、砂防のための造林	崖崩れ、崩壊、集水氾濫、土砂流出	
	丘陵面	30~ 40m	急峻 急峻 急峻 急峻 急峻	河川の流れに沿って ゆるく傾斜	矢田川系層	〃	①耕地が多い、 ②集団住宅 ③一部砂防のための造林	土砂流出、集水氾濫 崖崩れ	
	上位段丘面	20~ 35m	急峻 急峻 急峻	河川、池に向ってゆる く傾斜	段丘堆積層	〃	①畑地、集落 ②宅地、集落	一部崖崩れ	
段丘	中段段丘面	10~ 20m	殆んど 全部 急峻 急峻	無断層は沖積面より緩 く傾斜	熱田層、段丘堆積層 常滑礫層、矢田川系層	砂、シルト 砂 礫	①市街地、大集落、集落 ②畑地、一部水田	一部集水氾濫 一部内水氾濫	
	下位段丘面	3~ 15m	なし 急峻 急峻	河川、池に向ってゆる く傾斜	小牧礫層、大昔段層	〃	①水田が多い、一部畑地 ②市街地、大集落、集落	一部集水氾濫 一部内水氾濫 小河川の溢水	
	低位段丘面	2~ 10m	〃 〃 〃	急峻 急峻 急峻	鳥居砂礫層	砂、砂 礫	①水田 ②市街地、大集落、集落	小河川の溢水、内水氾濫、一部高層、河川災害	
低地	沖積面	0.5~ 2m	〃 〃 〃	下流に向ってゆるく傾 斜	兩陽層、沖積層	〃	①市街地、大集落、集落 ②一部水田	一部河川・高層災害 一部内水氾濫	
	沖積面	0	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃	砂、シルト 粘土	①水田 ②市街地、工場・運輸施設用地 大集落、集落	河川・高層災害 内水氾濫 地震災害	

## 2.4.2 低地の洪水災害

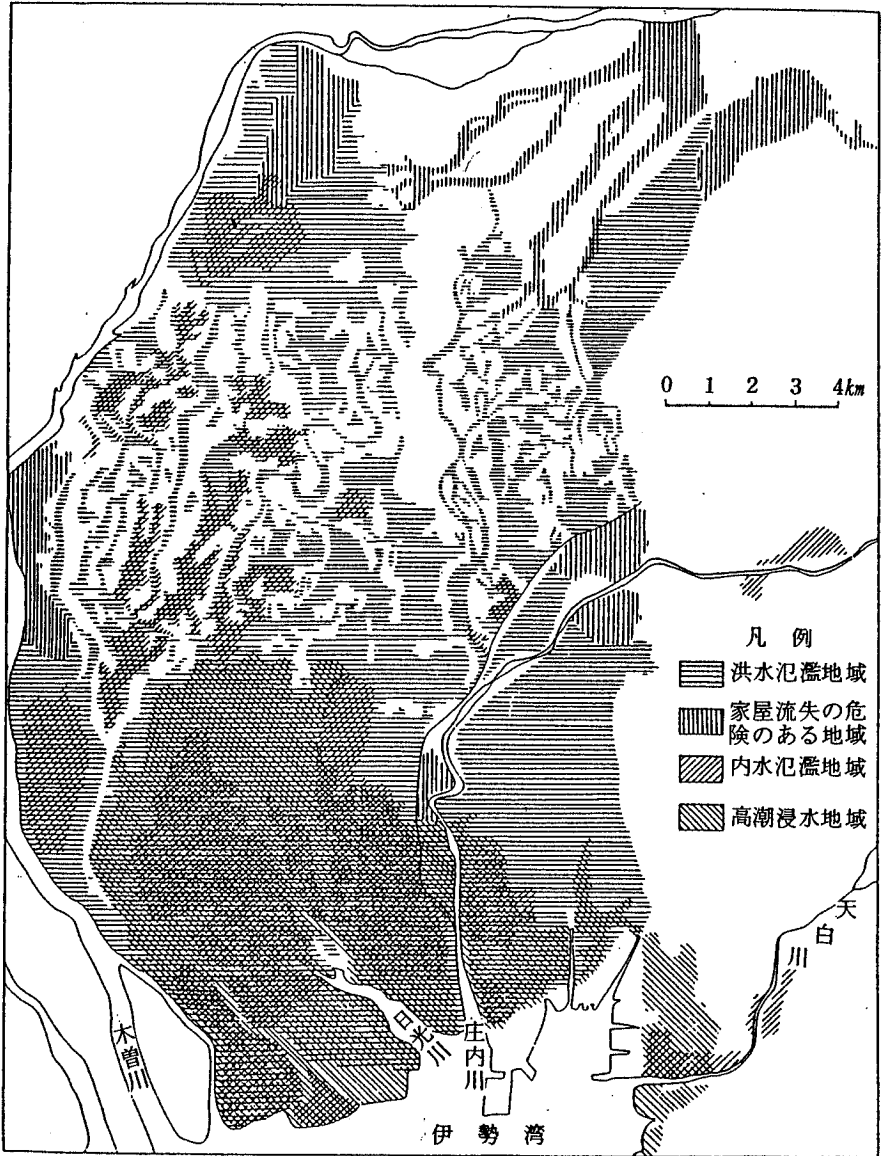
この地域における洪水の危険想定地域は1-12図に示すように濃尾低地の多くの場所にあり、とくに旧河道や後背湿地に卓越する。とりわけ、三角州や干拓地域について洪水の可能性は高く、「桑名・名古屋南部」図幅（岡田 1985）で概説しているので、これらを参照されたい。

濃尾低地ではとくに標高0 m以下の干拓地・三角州地帯が大きな被害を受け、明治以降だけでも10回に及ぶ。戦後でも、昭和28年の13号台風や同34年の15号（伊勢湾）台風による災害は甚大なものであり、これらはほとんど9月に集中している。とくに伊勢湾台風による高潮や洪水災害は大規模なもので1-12図に示す広範な地域を泥海と化し、多数の人命の喪失・都市機能の麻痺・宅地や水田の長期に及ぶ湛水を引き起こした（詳しくは、多田・大矢 1960、大矢 1960、名古屋市 1961、建設省中部地方建設局 1963、国土地理院 1968・'75など参照）。

こうした洪水の災害を受けやすい地域は地形条件や堤防の整備状況などからかなり判明している（国土地理院 1968・'75、大矢 1956~79など）ので、そうした地域では日頃からの対策が必要である。伊勢湾台風以後の広汎な防災対策事業の実施によって、洪水による危険性はかなり減少した。しかし、その後の地盤沈下や低地域への広範な住宅地・工場用地化などの急激な進行によって、洪水の危険性もまた増しつつあるとも考えられるので、そうした危険予想地域では関係当局や住民の対策が要請される。

## 2.4.3 地震災害

当図幅域付近を震央とするマグニチュード5以上の地震は2つほど知られている。その一つは1894（明治27）年1月10日のもので、震央はおよそ東経137°北緯35°付近とされている（宇佐美 1975）が、下記の被害分布からみると、濃尾平野北部の可能性が大きい。これは1891（明治24）年の濃尾地震（マグニチュード7.9~8.4）の余震中で最大のものであり、マグニチュード6.9~7.4とされている。岐阜県安八郡や愛知県葉栗郡・丹羽郡



1-12図 濃尾平野（愛知県域）の水害危険想定域  
 （愛知県水防計画書 1962による）

で屋根瓦の墜落、壁の亀裂・剝落・地割れなどがあった。とくに、葉栗郡宮田村近くでは、家の破損や石垣の崩壊が多く、石碑や石燈籠はほとんど倒れた。

1898(明治31)年11月13日には、木曾川中流域(震央:東経137°・北緯35'3")でマグニチュード6.0~6.5の地震があり、葉栗郡太田島村で家屋の傾斜、土蔵壁の亀裂・墜落等があり、周辺地域でも小被害があった。これも濃尾地震の余震とされている(宇佐美 1975)。

また、木曾川河口付近にはマグニチュード5前後の中地震が数回発生しているが、これらは養老断層とその副断層の活動によるものと考えられ、注目を要する現象である。

ところで、当図幅域には低地下に埋没した活断層がいくつか指摘されている(横尾ほか 1967、嘉藤・桑原 1967、岡田 1979、活断層研究会 1980)。これらはほぼ国鉄東海道本線沿いを走る岐阜—一宮線、大藪—津島線、大垣—今尾線などである。これらの活動度はあまり小さくなく(詳しくは上記文献参照)、多くは濃尾地震時に活動したらしいので、この地域を震央とする地震が将来発生する可能性はさして大きいとは言えないが、重要構造物などについては配慮が望ましい。

ところで、中京圏ないし東海地域まで範囲を広げると、大地震発生の可能性のやや大きい大規模活断層はかなりある。とくに注目されるのは、駿河湾を震央とするいわゆる東海地震であるが、養老断層や阿寺断層も要注意である(岡田 1979、活断層研究会 1980)。

過去の地震時の震害や震度分布については、宇佐美(1975)や飯田(1974~79)、井関(1966・78・80)、名古屋地方気象台監修(1971)などに詳しく解説されている。

さらに、いわゆる東海大地震を想定した愛知県の被害予測調査(環境科学研究会1978~80)も行われている。東海大地震のみならず、中部~近畿東部地域の大規模活断層からも大地震が発生する可能性はある。これらが発生した場合、一般的にいて、沖積層の厚い低地帯、とくにゼロメートル地帯は地震波の増幅が大きく、直接的な地震災害のみならず、地盤沈下(多田・井関1955

・66、名大地盤変動グループ1967、飯田1975、東海三県地盤沈下調査会1985など）・液状化現象(井関1978・'80)・堤防決壊に伴う湛水災害などの災害を受けやすい。そうした災害予想地域では日頃からの訓練や対策が望まれる。

(愛知県立大学 岡田 篤正)



## 引用・参考文献

(年代順→あいうえお順)

- 松沢 勲・嘉藤良次郎(1954)：名古屋およびその付近の地質、愛知県建築部、35P.
- 多田文男・井関弘太郎(1955)：濃尾平野の地形構造と地盤沈下、総理府資源調査会、1～82P.
- 大矢雅彦(1956)：木曾川流域濃尾平野水害地形分類図、資源調査会
- 大矢雅彦(1960)：水害地形分類図と伊勢湾台風による水害、地理調査所時報、24、13～20P.
- 多田文男・大矢雅彦(1960)：伊勢湾台風による低湿地干拓地域の災害について — その土地利用の現況と問題点、科学技術庁資源調査会報告、17、1～76P.
- 名古屋市(1961)：伊勢湾台風災害誌、443P.
- 町田 貞・太田陽子・田中真吾・白井哲之(1962)：矢作川下流地域の地形発達史、地理学評論、35、505～524P.
- 建設省中部地方建設局(1963)：伊勢湾台風復旧工事誌：上巻、575P.
- 貝塚爽平・木曾敏行・町田貞・太田陽子・吉川虎雄(1964)：木曾川・矢作川流域の地形発達、地理学評論、37、89～102P.
- 井関弘太郎(1966)：濃尾地震(1891年)にみられた濃尾平野の活断層、名古屋大学文学部研究論集、16、231～243P.
- 嘉藤良次郎・桑原 徹(1967)：名古屋市付近の新第三系・第四系 — 日本質学会地質見学案内書、名古屋大会3、26P. + 付図2
- 桑原 徹(1968)：濃尾盆地と傾動地塊運動、第四紀研究、7、235～247P.
- 小出 博(1968)：日本の河川研究——地域性と個性、東京大学出版会、377P.
- 国土地理院(1968)：2万5千分の1土地条件図「桑名」・「名古屋南部」

- ・「津島」・「名古屋北部」・「大垣」・「岐阜」・「豊田」および土地条件調査報告書（中京地域）、166P.
- 松田磐余（1968）：濃尾平野における空中写真による土質判読、地理学評論、41、285～290P.
- 松沢 勲（1968）：本州中部における傾動運動について、特に濃尾傾動地塊の構造発展、地質学雑誌、74、61～71P.
- 井関弘太郎（1969）：愛知県総説、自然・地形、日本地誌 12（愛知県・岐阜県）、22～33P.
- 名古屋グループ（1969）：伊勢湾周辺の第四系、319-329、地学団体研究会「日本の第四系」、435P.
- 日本建築学会東海支部・土質工学会中部支部・名古屋地盤調査研究会（1969）：名古屋地盤図、279P. +付図3
- 春日井団研グループ（1971）：春日井市付近の地形面、153-161、竹原平一教授記念論文集「中部地方の鮮新統および最新統」182P.
- 桑原 徹（1971）：瀬戸層群の堆積相、113～127、竹原平一教授記念論文集、182P.
- 高木信行（1971）：木曾川中流段丘の対比と形成に関する考察、愛知県教育大学「地理学報告」、36・37、117～122P.
- 名古屋地方気象台監修（1971）：愛知県災害誌、愛知県、548P.
- 井関弘太郎（1972）：三角州、朝倉書店、226P.
- 古川博恭（1972）：濃尾平野の沖積層、地質学論集、7、39～59P.
- 森山昭雄（1972）：沖積平野の微地形、地質学論集、7、197-211P.
- 大矢雅彦（1973）：沖積平野における地形要素の組合せの基本型、早稲田大学教育学部学術研究、22、23～43P.
- 飯田汲事（1974）：明治24年（1891）10月28日の濃尾地震の震害「名古屋市における既存の地震とその災害」、名古屋市防災会議、22～41P.
- 飯田汲事（1975）：濃尾平野南部地域の地盤沈下の実態とその解析、地盤

- 沈下の実態とその対策に関する調査研究報告書、愛知県環境部・愛知県地盤沈下研究会、21～38P.
- 井関弘太郎(1975):旧自然環境の復元と考察、朝日遺跡群第一次調査報告、57～62、愛知県教育委員会、109P.+図版
- 宇佐美竜夫(1975):資料 日本被害地震総覧、東京大学出版会、327P.
- 国土地理院(1975):2万5千分の1土地条件図「桑名」・「名古屋南部」・「津島」・「名古屋北部」・「大垣」・「岐阜」、および土地条件調査報告書(中京地域) 88P.P.
- 桑原 徹(1975):濃尾傾動盆地と濃尾平野、Urban Kubota, 11, 18～25P.
- 桑原 徹(1975):濃尾傾動盆地の発生と地下の第四系、愛知県地盤沈下研究会「地盤沈下の実態とその対策に関する調査研究」報告書、111～182P.
- 桑原 徹(1976):濃尾平野 — その生い立ちと人間とのかかわりあい、理科教室、19、№8、72～82P. №9、78～88P.
- 濃尾平野第四系研究グループ(1977):濃尾平野第四系の層序と微化石分析、地質学論集、14、161～183P.
- 森山昭雄(1977):木曾川平野表層堆積物の粒度組成、地理学評論、50、71～87P.
- 井関弘太郎(1978):昭和19年12月7日東南海地震による被害住家の分布と地盤条件、名古屋市防災会議地震対策専門委員会、13P.+付図
- 環境科学研究会(1978～1980):東海大地震を想定した愛知県における被害の予測調査報告書、その1、177P.+付図2、その2、125P.+付図4、その3(人的被害)、52P.愛知県防災会議地震部会
- 庄子士郎編(1978):愛知県地学のガイド、コロナ社、256P.
- 名古屋市防災会議(1978):濃尾地震文献目録、名古屋市市民局災害対策課、136P.

- 愛知県環境部(1979):愛知県環境利用適性調査、第二分冊、濃尾平野地域環境条件図
- 飯田汲事(1979):明治24年(1891年)10月28日濃尾地震の震害と震度分布、愛知県防災会議地震部会、304P.
- 海津正倫(1979):更新世末期以降における濃尾平野の地形発達過程、地理学評論、52、199~208P.
- 大矢雅彦・杉浦成子(1979):庄内川治水地形分類図(下流)2万5千分の1、建設省中部地方建設局・庄内川工事事務所
- 大矢雅彦(1979):地形分類より見た庄内川流域平野(名古屋周辺)の特色、早稲田大学教育学部学術研究、28、1~16P.
- 大矢雅彦(1979):河川の開発と平野、大明堂、163P. +付図
- 岡田篤正(1979):愛知県と周辺地域における活断層と歴史地震、愛知県の地質・地盤(その4)、「活断層」、愛知県防災会議地震部会、122P. +付図
- 森山昭雄・木下芳和(1979):濃尾平野下の河畔砂丘、愛知教育大学研究報告、28(社会科学編)、191-208P.
- 井関弘太郎(1980):地形・地質・地盤の概況、愛知県の地質・地盤(その1)、愛知県防災会議地震部会、43P.
- 井関弘太郎(1980):沖積層の分布と液状化現象、愛知県の地質・地盤(その3)、愛知県防災会議地震部会、78P. +付図3
- 活断層研究会(1980):日本の活断層 — 分布図と資料、東京大学出版会、363P.
- 井関弘太郎(1982):朝日遺跡における旧自然環境の復元と考察、朝日遺跡(本文篇1)、217~227P. 愛知県教育委員会、310P.
- 名古屋地方気象台監修(1982):愛知県災害誌(昭和45年~昭和55年編)、愛知県、633P.
- 水野時二(1982):庄内川流域を形成する各河川の概観、5~72、建設省中部地方建設局庄内川工事事務所「庄内川流域史」、511P.

- 森山昭雄（1982）：庄内川流域の地形・地質とその発達史、73～121、  
建設省中部地方建設局庄内川工事事務所「庄内川流域史」、511P.
- 飯田汲事（1983）：愛知県地盤の地震波増幅特性と地震危険度、愛知県防  
災会議地震部会、205P.
- 岡田篤正（1983）：愛知県土地分類基本調査・地形分類、5万分の1「岐  
阜・美濃加茂・瀬戸」、17～43P.愛知県、105P.
- 桑原 徹・応用地質調査事務所（1983）：愛知県の地質・地盤（資料編そ  
の1、尾張部）、愛知県防災会議地震部会、768P. +付図
- 坂本 享・桑原 徹・糸魚川淳二・富田康秀・脇田浩二・尾上 享（1983）  
：名古屋北部地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1図幅）、地質調  
査所、64P.
- 岡田篤正（1985）：愛知県土地分類基本調査・地形分類、5万分の1「桑  
名・名古屋南部」、19～59P. +付図、愛知県、113P.
- 東海三県地盤沈下調査会編（1985）：濃尾平野の地盤沈下と地下水、名古  
屋大学出版会、245P.